富樫館跡 Ⅳ

2007

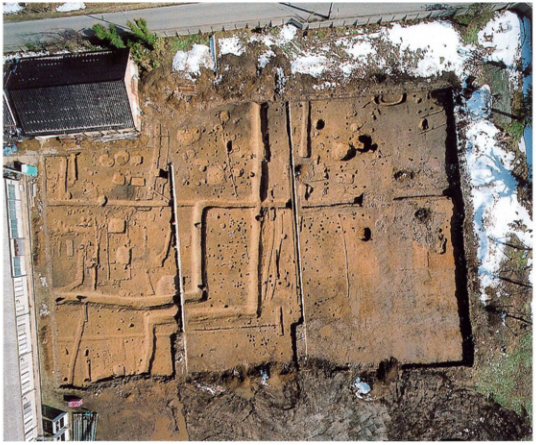
株式会社 大日製作所
石川県野々市町教育委員会

富樫館跡 Ⅳ

2007

株式会社 大日製作所
石川県野々市町教育委員会

調査地遠景（奥の樹木のない山が高尾城跡）



調査地全景

例　　言

1　本書は、富樫館跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2　遺跡の所在地は、石川県石川郡野々市町扇が丘地内である。
3　調査原因は、株式会社大日製作所工場施設増築工事にともなうものである。
4　調査にかかる費用は、株式会社大日製作所が負担した。
5　調査は、株式会社大日製作所からの依頼を受けて野々市町教育委員会が実施した。
6　現地調査は平成17年度に実施した。遺跡名・期間・面積・担当者は以下のとおりである。

遺跡名　　富樫館跡
期　間　　平成17年11月11日～平成18年２月14日
面　積　　2,680㎡
担当者　　田村昌宏　野々市町教育委員会文化振興課　主査

7　出土品整理は平成18年度に野々市町教育委員会が実施した。
8　報告書の刊行は平成18年度に野々市町教育委員会文化振興課が実施した。担当及び執筆・編集は田村昌宏（野々市町教育委員会文化振興課　主査）が行った。
9　現地調査から出土品整理、報告書刊行に至るまでに下記の機関、個人の協力を得た。（五十音順、敬称略）

大西顕、滝川重徳、布尾和史、布尾幸恵、林大智、向井裕知、安中哲徳、株式会社五井建築設計研究所、株式会社大日製作所

10　本書についての凡例は以下のとおりである。
(1)　方位は座標北を指し、座標は国土交通省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠している。
(2)　水平基準は海抜高であり、T．P．（東京湾平均海面標高）による。
(3)　出土遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真に対応する。
(4)　挿図の縮尺は図に示すとおりである。また、写真図版における遺物の縮尺は統一していない。
(5)　土層図の注記は、農林水産省農林水産技術会事務局・財団法人　日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に拠った。
(6)　遺構名称の略号は以下のとおりである。
掘立柱建物：SB　　竪穴状遺構：SI　　柵列：SA　　土坑：SK　　溝：SD
穴：P　　性格不明遺構：SX
11　調査に関する記録と出土遺物は、野々市町教育委員会が一括して保管・管理している。

目　　次

第1章　経　過 …… 1
　第1節　調査の経過 …… 1
　第2節　発掘作業の経過 …… 3
　第3節　整理作業の経過 …… 6

第2章　遺跡の位置と環境 …… 7
　第1節　地理的環境 …… 7
　第2節　歴史的環境 …… 7

第3章　調査の方法と成果 …… 11
　第1節　調査の方法 …… 11
　第2節　層序 …… 11
　第3節　遺構 …… 14
　第4節　遺物 …… 53

銭貨観察表 …… 70

遺物観察表（銭貨は除く。） …… 71

第4章　総　括 …… 76

写真図版 …… 83

挿図目次

第1図　工場施設増築計画図（S＝1/200）……1
第2図　試掘調査位置図（S＝1/800）……2
第3図　遺跡の位置……7
第4図　野々市町と周辺の遺跡（S＝1/30,000）…8
第5図　調査区位置図（S＝1/5,000）……10
第6図　発掘調査区グリッド図（S＝1/400）……12
第7図　土層断面模式図……13
第8図　遺構実測図SB1（S＝1/40）……15
第9図　遺構実測図SB2・3・5（S＝1/40）……17
第10図　遺構実測図SB4・SA1（S＝1/40）……18
第11図　遺構実測図SI1・2・3（S＝1/40）……19
第12図　遺構実測図SI4・SD2・3（S＝1/40）…20
第13図　遺構実測図SI5・6（S＝1/40）……22
第14図　遺構実測図SI8（S＝1/40）……23
第15図　遺構実測図SK3・4・6・7
（S＝1/40）……26
第16図　遺構実測図SK8～11・14～16
（S＝1/40）……28
第17図　遺構実測図SK12・13・17・20～22
（S＝1/40）……30
第18図　遺構実測図SK23～29（S＝1/40）……32
第19図　遺構実測図SK30・31・35（S＝1/40）…34
第20図　遺構実測図SE3・SK37・38（S＝1/40）…35
第21図　SD上層断面図（S＝1/40）……40
第22図　平面遺構図No.1（S＝1/100）……41・42
第23図　平面遺構図No.2（S＝1/100）……43・44
第24図　平面遺構図No.3（S＝1/100）……45・46
第25図　平面遺構図No.4（S＝1/100）……47・48
第26図　平面遺構図No.5（S＝1/100）……49・50
第27図　平面遺構図No.6（S＝1/100）……51・52
第28図　SI1・2・4～6出土遺物（S＝1/3）……58
第29図　SI9・10・SE3・SK1・2出土遺物
（S＝1/3）……59
第30図　SK3～5・7・8出土遺物（S＝1/3）……60
第31図　SK9・10・13・15・21・23・27・28・
32・34～36出土遺物（S＝1/3）……61
第32図　SK36・38～40・SD1出土遺物
（S＝1/3）……62
第33図　SD1・2出土遺物（S＝1/3）……63
第34図　SD2・3出土遺物（S＝1/3）……64
第35図　SD3出土遺物（S＝1/3）……65
第36図　SD3～5・7・8・10出土遺物
（S＝1/3）……66
第37図　SD10出土遺物（S＝1/3）……67
第38図　SD10・調査区内出土遺物（S＝1/3）…68
第39図　SD10・11・17・20・22・
調査区内出土遺物（S＝1/3）……69
第40図　SK4出土遺物……70
第41図　時期別遺構図
（14世紀後半～15世紀後半）……77
第42図　時期別遺構図
（15世紀末～16世紀前半）……78
第43図　富樫館跡調査全体図（部分）……80
第44図　富樫館とその周辺（加賀国守護所）
復元図……82

表目次

第1表　野々市町と周辺の遺跡……8
第2表　銭貨観察表……70
第3表　遺物観察表（銭貨は除く。）……71

図版目次

図版1　調査地北側・調査地中央　SB1・5
SI2・4～6・8完掘
図版2　SI10　SE2・3　SK3・4・7・12・17・
20・39完掘　SK8遺物出土状況
図版3　SK21～23・25・27・33～35・39　SD1・2完掘
図版4　SD3・4・8～11・17・19完掘
SD10宝塔（塔身）出土状況
図版5　出土遺物（1）　7～110
図版6　出土遺物（2）　114～190
図版7　出土遺物（3）　193～213　骨

第１章　経過

第１節　調査の経過

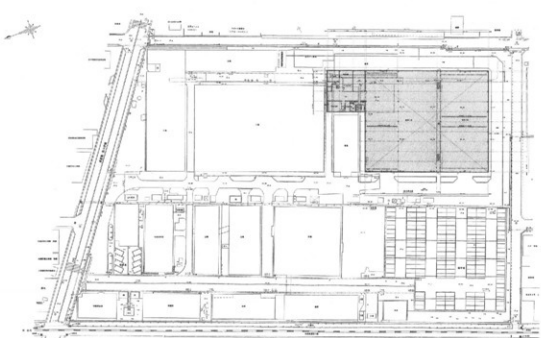
平成17年８月半ば頃、株式会社大日製作所（以下、大日製作所）から野々市町教育委員会（以下、町教育委員会）より、大日製作所敷地内にて工場の増築工事を計画しており、その際の埋蔵文化財の取り扱いについて協議したいと連絡があった。早急に大日製作所、株式会社五井建築設計研究所、町教育委員会の間で協議を行った。計画では工場増築面積は約3,500㎡、同年11月から工事を着工したいという内容であった。町教育委員会は当該地が埋蔵文化財包蔵地にあたることから、増築工事予定地内で試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を確認した上で、取り扱いについて決定したいということを伝えた。大日製作所はこの件について了承し、同月末日に工場増築予定地内で試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、工場増築予定地内の西側の一部以外は埋蔵文化財が存在することがわかった。工場増築の計画ではエリア全域が地下遺構に影響を及ぼす工事となり、既存施設で破壊されている箇所を除く2,680㎡の対象地については発掘調査による記録保存を行うこととした。

その後、石川県教育委員会に埋蔵文化財包蔵地における土木工事に取り扱いの手続きを行い、同年８月31日に県からの承認をもらう。これと同時に大日製作所と野々市町との間で発掘調査による具体的な協議を重ね、同年11月、株式会社大日製作所工場施設増築用地埋蔵文化財に関する協定書を締結した。

調査については平成17年度と18年度の２ヵ年を予定し、平成17年度は現地での屋外調査、翌18年度は出土した遺物の整理及び報告書の刊行とした。

試掘調査の詳細な概要は以下のとおりである。

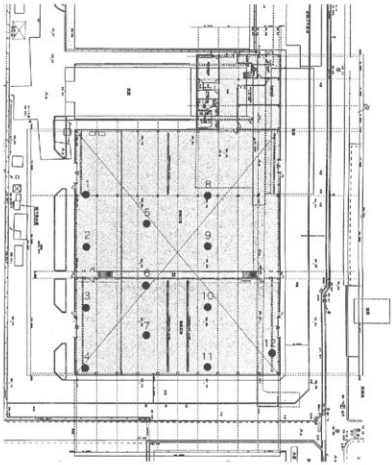


第１図　工場施設増築計画図（S＝１/200）　網かけが増築箇所

◎調査目的と方法

大日製作所敷地内及び周辺地には埋蔵文化財が存在することが判明している。そこで、工場増築予定地内の埋蔵文化財の様相を詳細に把握するために、0.4バケット仕様掘削機でトレンチ掘りを実施した。トレンチの規模は２ｍ×１ｍを基本とし、不明な箇所があれば、範囲を広げていった。

試掘坑１　現高から58㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。遺構・遺物は確認していない。
試掘坑２　現高から90㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。後世の削平を大きく受けている。
試掘坑３　現高から66㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。後世の削平を大きく受けている。
試掘坑４　現高から52㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。ピットを１基確認した。
試掘坑５　現高から70㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。ピットを１基確認した。
試掘坑６　現高から97㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。ピットを３基確認した。
試掘坑７　現高から94㎝掘削したところで、遺跡の面に到達した。土坑状遺構２基と南北ラインの溝１条確認した。



第２図　試掘調査位置図（S＝１/800）

試掘坑８　現高から86cm掘削したところで、遺跡の面に到達した。直径30cm程のピットを１基確認した。
試掘坑９　現高から112cm掘削したところで、遺跡の面に到達した。トレンチ幅以上の規模をもった東西ラインと想定される大溝を確認した。
試掘坑10　現高から96cm掘削したところで、遺跡の面に到達した。土坑状遺構１基、ピットを３基確認した。
試掘坑11　現高から97cm掘削したところで、遺跡の面に到達した。土坑状遺構1基、ピットを３基確認した。
試掘坑12　現高から102cm掘削したところで、遺跡の面に到達した。土坑状遺構2基、ピットを１基確認した。また、中世後半の土師器皿1点が出土した。

◎結果

試掘調査の結果、工場増築予定地内には遺跡が全面に存在していることが判明した。ただし、開発予定地の西側については後世の水田耕作や工場関連施設の影響で遺跡がすでに破壊されている可能性が高く、当該地については慎重な工事を行い、主要な遺構・遺物が発見された場合は速やかに工事を止めて、町教育委員会と協議することとした。

その他の場所については、記録保存を目的とする発掘調査を実施することとした。

第２節　発掘作業の経過

平成17年11月に締結した協定書に基づき、早速、平成17年度の発掘調査における契約を同月に締結した。現地での調査については工事着工時期の関係もあり、11月から翌18年１月後半までを予定し、調査主体は町教育委員会で文化振興課文化財職員１名が担当した。現地の作業員は町の臨時職員として雇用した近隣に在住する17名を選出した。

作業は11月11日（金）より開始した。最初は大型掘削機により遺構面までの土を掘削し、同月22日（火）より作業員による人力作業が始まった。同月24日（木）は水準点測量とグリッドの杭打ちが行われた。作業は11月までは順調であったが、12月に入ると調査区内で堀のように深い大溝を検出したことで作業の効率が若干落ちてきた。それに追い討ちをかけるように、同月13日（火）より近年にない大雪が降り、現地の調査は中断せざるを得ない状況に陥った。同月21日（水）調査を再開した。まずは、70cmもの積雪となった調査区とその周辺の除雪作業から始まった。４日間除雪作業を行ってから、改めて掘削作業を実施したが同月は荒天が多く、除雪と並行していかなければならず作業は滞った。同月の調査は27日（火）まで行い、年が明けた１月は４日（木）から始めた。１月前半までは雪の日が多く、作業もなかなかはかどらなかったが、半ばを過ぎると好天の日が続き再び作業は起動に乗っていった。

予期せぬ大寒波到来のため、予定していた１月までに現地調査は完了することができず、２月に入って再び大日製作所と協議の場をもった。その結果、２月半ばまでには現地調査を完了することでまとまり、同月の作業を急ピッチで進めた。同月８日（水）までに掘削作業は終了し、翌９日（木）から調査区内の除雪、水汲み及び清掃を開始した。同月13日（月）、ラジコンヘリコプターによる空中写真測量を実施し、同日のうちに測量が無事に済んだことを確認した。翌14日（火）調査機材等の搬出作業を終えて、当年度の現地調査を完了した。

現地調査の詳細な経過は以下のとおりである。

重機による表土掘削

遺構検出（SD7）風景

遺構掘削（SD3）風景

突然の大雪（積雪約70cm）

平成17年

11月11日（金）調査着手　0.7仕様掘削機１台搬入。
11月12日（土）８ｔキャリアダンプ１台搬入。重機による表土除去開始。
11月14日（月）重機による表土除去、残土運搬。
11月15日（火）重機による表土除去、残土運搬。
11月16日（水）重機による表土除去、残土運搬、残土盛り土及び整地。
11月17日（木）重機による表土除去、残土運搬、残土盛り土及び整地。
11月18日（金）重機による表土除去、残土運搬。
11月21日（月）重機による表土除去、残土運搬。
　発掘調査機材搬入。
11月22日（火）重機による表土除去、残土運搬、残土盛り土及び整地。
　作業員による調査開始。壁面削り・遺構検出。
11月24日（木）重機による表土除去、残土運搬、残土盛り土及び整地。
　作業員による遺構検出。
　㈱日本海航測によるグリッド杭打ち、水準点測量。
11月25日（金）重機による表土除去、残土運搬、残土盛り土及び整地。
　作業員による遺構掘削。
　㈱日本海航測によるグリッド杭打ち。
11月26日（土）0.7仕様掘削機、８ｔキャリアダンプ搬出。
11月28日（月）遺構掘削。遺構土層観察。
　㈱日本海航測によるグリッド杭打ち。
11月29日（火）遺構掘削。遺構略測図作成。
11月30日（水）遺構掘削。ベルトコンベア設置。

12月１日（木）遺構検出、遺構掘削、写真撮影。遺構略測図作成。
12月５日（金）遺構掘削。遺構略測図作成。
12月６日（火）遺構掘削。遺構略測図作成。
12月７日（水）遺構掘削。遺構上層観察。ベルトコンベア移動。
12月９日（金）遺構掘削。
12月12日（月）遺構掘削。遺構土層観察、実測図作成。
12月13日（火）除雪。遺構掘削。遺構上層観察。
降雪のため、発掘調査一時中断。
12月21日（水）除雪。ベルトコンベア移動。
12月22日（木）除雪。
12月24日（土）除雪。
12月25日（日）除雪。ベルトコンベア移動。
12月26日（月）遺構掘削。遺構土層断面実測図作成。
12月27日（火）遺構掘削。ベルトコンベア移動。

平成18年
１月４日（水）除雪。遺構掘削。
１月５日（木）除雪。ベルトコンベア移動。
１月６日（金）除雪。ベルトコンベア移動。
１月９日（月）除雪。ベルトコンベア移動。
１月10日（火）除雪。ベルトコンベア移動。
１月11日（水）除雪。ベルトコンベア移動。水汲み。遺構検出。遺構掘削。写真撮影。
１月12日（木）0.7仕様掘削機１台搬入。重機による除雪。0.7仕様掘削機1台搬出。
遺構略測図作成。遺構土層観察。
１月13日（金）遺構掘削。遺構土層断面実測図作成。ベルトコンベア移動。
１月15日（日）水汲み。遺構検出。遺構掘削。写真撮影。遺構略測図作成。
１月16日（月）遺構掘削。遺構上層観察・断面実測図作成。ベルトコンベア移動。
１月17日（火）遺構検出。遺構掘削。遺構土層観察・断面実測図作成。遺構略測図作成。
１月18日（水）遺構掘削。遺構土層観察・断面実測図作成。
１月19日（木）遺構検出。遺構掘削。写真撮影。遺構略測図作成。
１月20日（金）遺構検出。遺構掘削。写真撮影。遺構略測図作成。
１月21日（土）遺構掘削。遺構土層断面実測図作成。
１月24日（火）除雪。遺構掘削。遺構上層断面実測図作成。
１月25日（水）除雪。遺構掘削。
１月26日（木）遺構掘削。遺構土層断面実測図作成。ベルトコンベア移動。
１月27日（金）遺構掘削。遺構土層断面実測図作成。
１月28日（土）除雪。遺構掘削。遺構上層観察・断面実測図作成。
１月29日（日）除雪。遺構掘削。遺構土層断面実測図作成。
１月30日（月）除雪。遺構土層断面実測図作成。ベルトコンベア移動。
１月31日（火）除雪。遺構検出。写真撮影。ベルトコンベア移動。
２月１日（水）遺構掘削。遺構略測図作成。
２月２日（木）遺構検出。遺構掘削。写真撮影。遺構略測図作成。

2月3日（金）遺構掘削。遺構土層観察。
2月4日（土）遺構掘削。
2月5日（日）除雪。遺構掘削。
2月6日（月）遺構掘削。ベルトコンベア移動。
2月7日（火）除雪。遺構掘削。写真撮影。遺構土層断面実測図作成。
2月8日（水）遺構検出。遺構掘削。写真撮影。
2月9日（木）除雪。調査区内清掃。写真撮影。
2月10日（金）調査区内清掃。写真撮影。ベルトコンベア移動。
2月11日（土）調査区内水汲み。清掃。
2月12日（日）除雪。調査区内清掃。写真撮影。ベルトコンベア移動。
2月13日（月）除雪。調査区内水汲み。調査区内外清掃。
㈱日本海航測によるラジコンヘリコプターの空中写真測量。発掘調査機材洗浄・整理。
2月14日（火）発掘調査機材洗浄。搬出。現地調査完了。

第3節　整理作業の経過

平成18年度調査は4月に事業計画書に基づいて契約を締結した。内容は現地で実施した調査の遺物や図面の整理、及び報告書の刊行である。主体者は町教育委員会、文化振興課文化財担当職員が1名担当した。遺物や図面の整理作業は町で雇用した臨時作業員2名が4月から6月までを予定し、報告書の刊行においては町担当職員が執筆・編集を行った。

整理作業手順は出土した遺物の洗浄・乾燥、各遺構別に区分・選別、実測図作成、遺物や遺構実測図の製図である。作業は4月から始まった。遺物の実測点数が予想以上に多かったため、当初計画より半月ほど伸びたが、7月13日（木）に完了した。

その後、文化財担当職員が報告書の執筆を10月より開始した。遺物の写真は執筆も完了に近い平成19年2月後半から3月前半にかけて撮影をした。その後、すべてを取りまとめた編集を行い、同年3月に刊行した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

野々市町は石川県のほぼ中央、石川平野の要地に位置する。町の大きさは南北約6.7km、東西約4.5kmで、行政域として北と東は金沢市、西と南は白山市に接する。町域は、霊峰白山を源とする県下第一級河川手取川によって形成された手取川扇状地の東部にあたり、扇央部と扇端部の狭間に位置する。当町で最も高い標高地は50m、最も低い地点は10mで、なだらかな緩斜面となる地勢をみせているが、視覚上では平坦面が続いているように見える。

当町を含む石川平野は古代より稲作が発展した地域で、戦後の昭和30年代まで町内の主産業は稲作農業であった。昭和40年代の高度経済成長期以降は、県庁所在地金沢市に隣接した町という地理的条件から商業施設や住宅地の開発が著しくなる。特に、北部の御経塚地区や南部の三納・粟田・新庄地区は大型スーパーなどの立地が相次ぎ、金沢市郊外の小売業の中心地となっている。また、石川県立大学、金沢工業大学などの教育機関も多く、学園町としての性格も持ち合わせている。

第３図　遺跡の位置

現在の野々市町は平坦な地形であるが、古代以前は微高地と微低地が混在する凸凹の多い地形であった。これは手取川から派生する多くの小河川が洪水や氾濫を繰り返すことで鳥状地形がつくり出されたからである。富樫館跡を含む遺跡の多くは低地と低地の間にある微高地上に存在する。

富樫館跡は野々市町東部の住吉町・扇が丘地内に所在する。この地域は、手取川よりも木町東方にある富樫丘陵から派生する河川から流出する土砂堆積によって形成されたとされ、周辺一帯はあまり起伏の激しい高低差はなかったようである。本遺跡は富樫丘陵を源とする高橋川によって形成された小扇状地上の一角にあり、標高は20mを測る。

第２節　歴史的環境

富樫館跡が所在する石川平野東部は遺跡が集中する地域で知られ、縄文時代から江戸時代にかけて注目すべき遺跡が数多くある。縄文～古墳時代は標高10m以内の扇状地扇端部に多く立地する。これは、手取川から流出する小河川が扇央部途中で地下へ潜り伏流水となって地上に噴きあがるのが標高10m以内の箇所にあたり、この水の育みが遺跡に大きく関係するからである。

縄文時代の主要な遺跡では、２御経塚遺跡や３米泉遺跡が挙げられる。これらの遺跡は縄文時代後・晩期の大集落跡で、竪穴建物や環状木柱列、多彩な土器・石製品などが出土している。

弥生時代は農耕文化が定着する時代であるが、野々市町周辺では中期まで目立った遺跡は存在しない。後期になってようやく各地で集落が増加してくる。町内では２御経塚遺跡・６押野タチナカ遺跡・10高橋セボネ遺跡などがある。

古墳時代に入ると再び遺跡数は激減する。町域北西端に御経塚シンデン古墳（第２図枠外　２御経塚遺跡より西方）といった前期古墳がいくつか存在するが、集落では18額新町遺跡や上荒屋遺跡（第２図枠外　２御経塚遺跡より北方）程度しかなく、弥生時代後期とは比較しようのない少なさである。

奈良・平安時代には、手取川扇状地扇央部で政治勢力を背景とした新規開発が着手される。

第4図　野々市町と周辺の遺跡（S＝1／30,000）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	粟崎遺跡	縄文　古代　中世	14	扇が丘ヤグラダ遺跡	古代　中世
2	御経塚遺跡	縄文　弥生　古墳　古代　中世　近世	15	扇が丘ハワイゴク遺跡	縄文　弥生　古代　中世
3	米泉遺跡	縄文　弥生　古代	16	扇台遺跡	弥生　古代
4	押野大塚遺跡	縄文　弥生	17	馬替遺跡	縄文　古代
5	押野ウマワタリ遺跡	弥生　中世	18	額新町遺跡	古墳　古代
6	押野タテナカ遺跡　押野館跡	縄文　弥生　中世	19	堀内館跡	縄文　中世　近世
7	横川本町遺跡	弥生　中世	20	高尾城跡	中世
8	三日市A遺跡	縄文　弥生　古代　中世	21	三納アラミヤ遺跡	縄文　古代
9	三日市ヒガシタンボ遺跡	弥生　古代　中世	22	三納トヘイダゴシ遺跡	縄文　古代　中世
10	高橋セボネ遺跡	弥生　古代	23	三納ニシヨサ遺跡	縄文　中世
11	山川館跡	縄文　中世	24	東田遺跡	縄文　古代　近世
12	扇が丘ゴショ遺跡	弥生　古代　中世	25	下新江アラチ遺跡	古代
13	曽原キツネヤブ遺跡	中世　近世	26	上林新庄遺跡	古代

第1表　野々市町と周辺の遺跡

7世紀には町内西南端に位置する末松廃寺跡（第2図枠外　26上林新庄遺跡より西方）が建立され、それをきっかけに周域南側の扇央部で生産域の拡大が図られる。それに伴い、21三納アラミヤ遺跡・24栗田遺跡・25下新庄アラチ遺跡・26上林新庄遺跡などの大規模な集落跡が各地で確認されている。

中世に入ると、手取川扇状地の更なる開発に乗り出す在地武士の林氏と富樫氏が台頭してくる。林氏は野々市町南部から白山市鶴来地区にかけて、富樫氏は野々市町東部の高橋川流域からその北方にあたる伏見川中流域一帯にかけて地盤を築いていった。林氏が活躍する鎌倉時代、高橋川を天然の要害とした武士の居館跡が扇が丘地内に出現する。（15扇が丘ハワイゴク遺跡）この他、近隣における当該時期の集落遺跡には22三納トヘイダゴシ遺跡がある。

承久の乱（1221）以降、林氏の勢力は衰え、富樫氏が台頭してくる。建武2年（1335）富樫高家は加賀国の守護職に任ぜられ、その中心地となる守護所を野々市に構えた。この守護所こそが今回の発掘調査対象となる富樫館跡である。富樫館は、幅6～7m、深さ2.5mの規模をもつ堀や土塁で周囲を囲み、その大きさは一辺約100mの1町規模であったと推定されている。周囲には家臣団の屋敷（11山川館跡）や市場などがこれまでの調査で明らかになっており、城下町のような都市的機能が存在したようである。また、富樫館より北方2㎞には富樫氏庶流の屋敷跡である押野館跡や東南2㎞の富樫丘陵一角には詰城として機能していた高尾城跡が存在する。また、当該時期の集落遺跡では、8三日市A遺跡、12扇が丘ゴショ遺跡、23三納ニシヨサ遺跡で確認されている。

近世に入ると野々市周辺は金沢城下町の近郊地として各地で農村が点在するようになる。富樫館跡の北隣にある旧野々市村（現本町地区）も稲作を主体とした農村のひとつであるが、北陸を縦断する北国街道の宿駅にもなっており、周辺の農村集落よりも形態は違っていたようである。

近代以降、富樫館とその周りは大きな変革を見せる。明治9年（1876）、欧米農法を導入して農事改良を進める目的として、住吉町から本町にかけて農事社と呼ばれる施設が設置された。その一環として耕地の田区改正の実験を農事社周辺で行われた。この耕地の改正事業によって、これまで残存していた富樫館の堀や土塁は滅失してしまい、その存在自身も忘れ去られていった。その後、本町地区の耕地整理は大正3年以降本格的に取り組まれている。

本調査地内にあたる株式会社大日製作所は、昭和12年扇が丘地内の北陸鉄道石川総線の沿線において創業された。当時は大日特殊製作所という名称で、海軍関係の軍需工場として電気機械を生産していた。現在は、高低圧配電盤・分電盤・キュビックル・制御盤・電磁開閉器などを生産している。

住吉町や扇が丘に残る小字には「ジョウカク」「ナガドイ」「マムシドイ」といった館に関連するような名称がある。大日製作所周辺は「オハカ」と呼ばれ、照台寺（現本町3丁目）の寺院があったという言い伝えが残っている。工場施設の南西端には「照台寺」と彫られた石碑が立っていたそうであるが、標柱自身は照台寺境内に移され、現在は基礎部しか残っていない。

第5図　調査区位置図（S＝1/5,000）

参考文献

『野々市町小史』　1953　野々市町役場
『野々市町史　集落編』2004　野々市町史編纂専門委員会
『図説　野々市町史』　2005　野々市町史編纂専門委員会

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

本調査区の試掘調査は、大型掘削機によるトレンチ掘りの方法で行った。トレンチの数は12箇所である。

試掘調査の結果、開発予定地全域に埋蔵文化財が存在することがわかった。ただし、開発予定地西側４分の１と北東側の突出した範囲については後世の水田耕作及び既存工場施設のカクランによってすでに遺跡が破壊を受けている可能性が高いと想定され、その箇所については慎重工事で対応し、残りの箇所は発掘調査することとなった。

発掘作業を実施するにあたり、最初に開発予定地の設定を大日製作所側にお願いした。それを基に縄張りを設定し、大型掘削機等で遺構面までの土砂を除去した。掘削作業終了後、㈱日本海航測に公表座標に則ったグリッド杭の設定を委託した。グリッドは10m格子で、南西隅を基準にして南から北へは算用数字、西から東へはアルファベットでグリッド番号を表記した。（第６図参照）グリッド杭設定と同時進行で、本格的な調査を開始した。具体的な作業は、人力による掘削や各遺構の記録の図示、写真撮影などである。

調査の手順としては、掘削機による表土除去作業で判明した遺構密度の高い北東部から開始し、カクランの多い西南調査区は最後に実施することにした。結果的には時間等の制約上、グリッドＡ・Ｂ－１・２は詳細な調査作業をおこなうことはできなかった。この箇所については掘削機での土砂除去の段階で、後世のカクランにより破壊を受けた箇所が多く、また、遺存する遺構もピット（小穴）が若干みられる程度で、遺跡としての密度は希薄になっていくことが判明している。これらの作業を完了した後、調査区内の水溜みや清掃を行い、㈱日本海航測にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影と測量を実施してもらい、現地での調査を完了した。

整理作業については、御経塚地内にある野々市町ふるさと歴史館内の調査整理室で実施した。作業内容は、まず出土した遺物を水で洗浄し乾燥させ、乾燥した遺物に細かい字で遺跡名や出土した地点などを注記する。注記後、一部の遺物を実測する。これらの遺物実測図や現地で表記した遺構実測図を製図する。という手順である。

これらの作業完了後、調査担当者が遺物の写真撮影、執筆、図面・写真のレイアウト等を行い、報告書を刊行した。

第２節　層序

層序については、第７図の土層断面模式図を基に説明していく。

第１層は、戦前に創業を開始した大日製作所の盛土整地層である。大日製作所の方の話しによると、本調査地一帯は本所創業頃、隣接している北陸鉄道の線路を分岐させて貨物車を引き込む操車場が存在したという。調査区内にはその名残と思われる東西に細長いコンクリート擁壁２箇所を確認した。

第２層は、大日製作所開設前の水田耕作土で、土質は灰色粘質土である。

第３層は、灰褐粘質土をした近世から近代までの耕作土と考えられる。

第４層は、黒色粘質土・暗灰褐粘質土を基本とする層で、中世の遺構面及び古代以前の包含層と想定している。この層は後世の耕作等によって削平されている箇所がいくつもあった。なお、本遺跡は中世が主体となるので、この面で詳細な精査を行えばよかったが、遺構検出など作業において時間のかかることが予想されたため、後述する第５層手前まで掘削機で除去した。

第５層は黄褐粘質土をベースとする古代以前の遺構面かつ地山面である。粘質土ではあるが、砂土も多く混じっており、水捌けのよい土質である。なお、これより30cm程掘削すると砂礫層となる。

第6図　発掘調査区グリッド図（S＝1/400）

1	盛　土
2	灰色粘質土 （水田耕作土）
3	灰褐粘質土 （近世～近代の耕作土）
4	黒色・暗灰褐粘質土 （包含層）
5	黄褐粘質土 （地山土）

第7図　土層断面模式図

第3節　遺構

本調査で発見された主要な遺構は掘立柱建物、竪穴状遺構、土坑、溝などである。これらの遺構で最も目を引くのは調査区中央を走る2条の大溝（SD2、SD3）である。この大溝を境に北側半分及び東側半分に建物や土坑などの遺構が集中する。また、竪穴状遺構は調査区の北半、土坑は調査区北東部及び東部と、それぞれの遺構が集中するブロックがある。小規模な溝は大溝に規制された状態で掘られている。このことから、大溝で区割りされた空間地の中は、小さな溝で仕切られた小区画地がいくつも形成され、それぞれの中に様々な施設が造られていたようである。

以下は、各遺構の個別の概要である。

SB1

調査区中央より北側のグリッドC－6に位置する。N3°Eの南北に桁行きをもった建物である。調査段階では北西隅に根石と思われる石があったことから礎石建物と想定していたが、ほかの穴が掘立柱のタイプであったことから現在は掘立柱建物と考えている。桁行き3間で5.7m、梁行き2間で3m、床面積約17㎡を測る。柱穴は直径25～40cmの歪な円形が多く、深さは22～52cmと幅広い。南東隅の柱穴については、その箇所にSI5が掘り込まれていたことから、その痕跡を見つけることはできなかった。また、北西隅の礎石と想定していた箇所については、石を外すとその下部で柱穴らしいピットを確認した。なお、この建物と重複するSI5やSK4との前後関係はわからない。

SB2

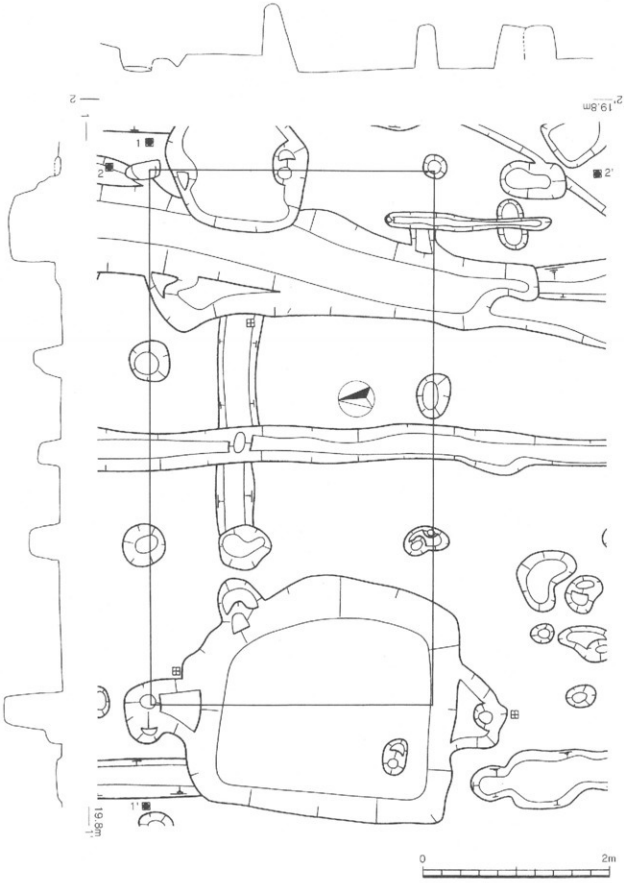
調査区北東隅のグリッドE－7に位置する。そのほとんどは調査区外となるため全体の様相はわからない。確認できた建物の構造は南半の一部で、東西方向が桁行きと考えられる。南辺となる東西方は3間で2.9mの長さをもつ。梁行きと想定される南北方の寸法等はわからない。柱穴は円形が主体で、直径20～40cm、深さは15～45cmである。

SB3

調査区北東隅のグリッドE－7に位置し、SB2とは重複する。建物のほとんどは調査区外となることから全体構造はわからないが、東西桁行きの建物になると想定される。南辺となる東西方は3間で、長さは2.9mを測る。柱穴は方形に近いものや円形と様々な形をしており、直径20～40cm、深さ16～64cmである。SB2とは同規模で、位置的にも重複することから両建物の性格は同じでどちらかが改修したものと考えられる。なお、その前後関係は不明である。

SB4

調査区南半中央のグリッドC－2・3に位置する。規模は4間×1間の南北棟で、向きはN3°Eである。南北ラインの長さは5.2m、梁行きとなる東西方は2.0m、床面積は約10.4㎡となる。柱穴は円形で、直径20～40cm、深さ10～50cmを測る。建物内を横切るSD18との前後関係は、切り合い等からSD18の方が新しいことがわかっている。



第8図　遺構実測図SB1（S＝1/40）

SB5

調査区南東隅のグリッドE－1にある２間×１間の南北棟の建物である。向きはN11°Wで、隣接するSD20及びSD21とは同じ方向となる。桁行きとなる南北方の長さは3.8m、梁行きとなる東西方の長さは2.7m、床面積は約10.3㎡である。柱穴は隅丸方形と円形があり、直径30～50cm、深さ50～75cmといずれの穴も深めである。柱穴の規模や深さ、方向などから上記で報告した建物とは構造を異とし、古代の建物と推定したい。

なお、グリッドC－４のSD２とSD３に囲まれた一角と、グリッドD－４、E－４のSI８やSK20～32の土坑群に囲まれた一帯には柱穴となりうるピットがいくつも見られ、建物の存在を示唆することができたが、その復元に至ることはできなかった。このことから、本調査区には上記報告以外に数棟の建物があったと考えられる。

SA1

調査区中央よりやや北側にあるグリッドC－５の、SI４とSD８との間に並ぶ柵列である。南北ラインで、向きはN７°Wである。長さは5.8mである。柱穴と柱穴との間隔は北から2.0m、1.2m、0.7m、1.0m、0.9mである。柱穴は北端が方形で、残りは円形及び楕円形である。穴の大きさは直径（一辺）15～50cm、深さ10～40cmを測る。北から3番目の穴からは炉縁石の残欠が出土している。

SI1

調査区北西隅、グリッドA－６に位置する。隅丸方形のプランを呈し、南端はSI２によって切られている。南北長270cm、東西長84cm以上、深さ40cmを測る。遺構の半分以上は西側調査区外に伸びるため、全体の様相はわからない。遺物は土師器皿、瀬戸灰釉碗、鉄釘が出土している。時期は14世紀後半である。

SI2

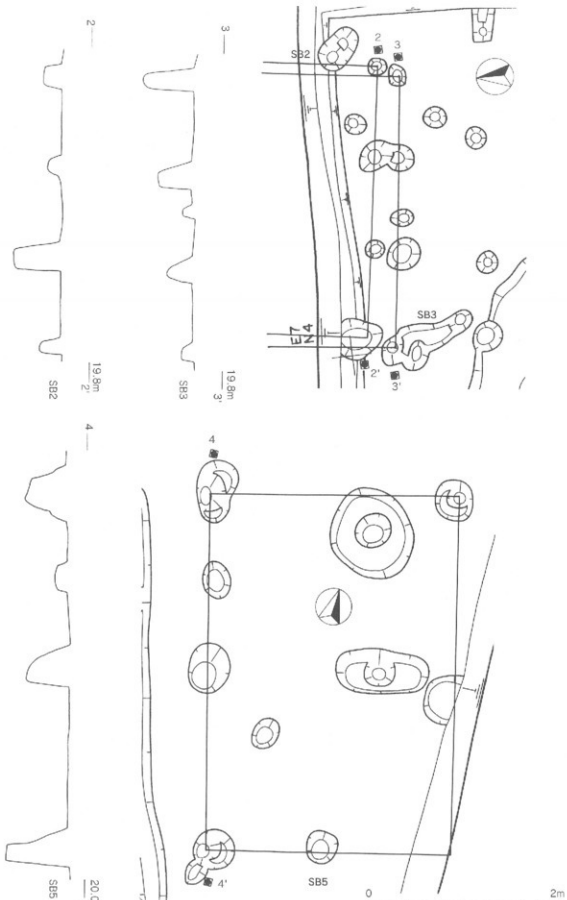
グリッドA－６、SI１のすぐ南にある長方形をした竪穴状遺構である。この遺構も西側調査区外にのびるため、全体の規模はわからない。南北長182cm、東西長204cm以上、深さ35cmを測る。壁の立ち上がり付近で20cm程埋没した土の上から炉縁石数点が出土した。これらの石は廃棄によるものと思われる。この他、土師器皿、越前焼甕片が出土している。時期はわからない。

SI3

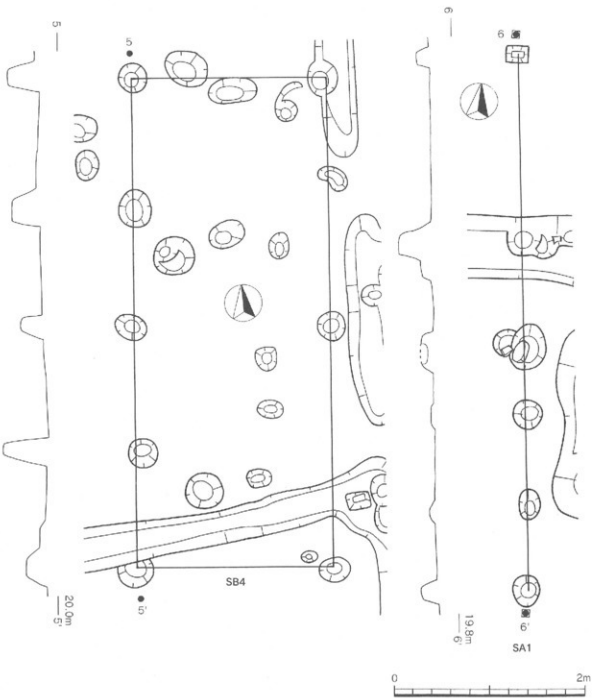
SI２の東隣、グリッドB－６に位置する。東西長380cm、南北長260cmの長方形をし、東端には近世以降の溝SD22によって切られている。黒色粘質土の覆土を有しているが、深さは５cm前後と浅く、遺物は出土しなかった。SD22を挟んだ東側に、SI3と同様の規模及び深さが同じである方形状の遺構を見ることができ、平面プランの前後関係からSI3掘削前に機能していた竪穴状遺構と考えられる。

SI4

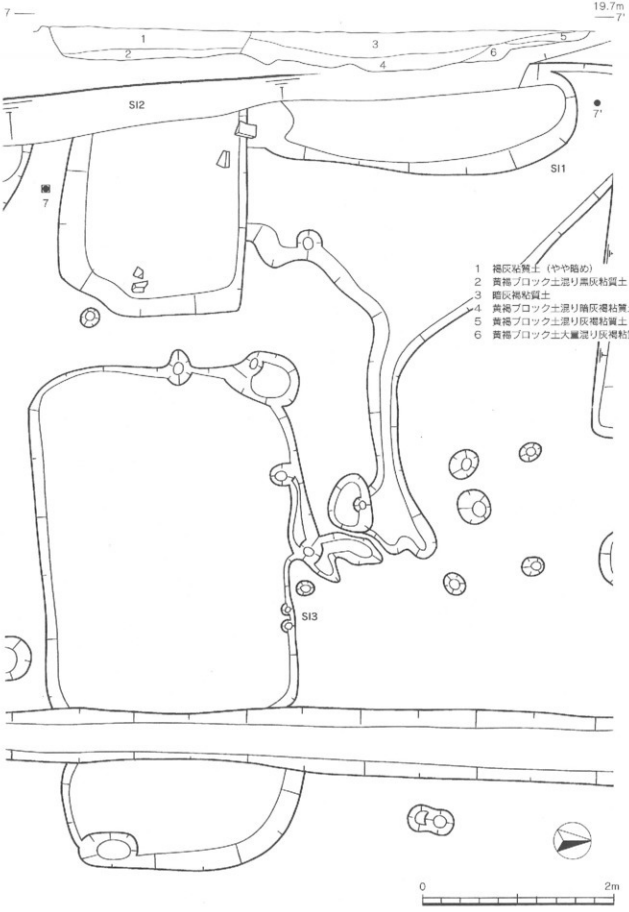
調査区中央からやや北寄りのグリッドC－５に位置する。西側は大溝SD２によって切られており、全体の規模はわからない。平面図からは、南北長460cm、東西長320cm以上、深さ40cm前後の方形プランに見えるが、土層断面からは一辺250cm前後の規模をしたタイプのもの２基が切りあって存在していたようである。遺物は、14世紀後半の土師器皿のほか、越前・珠洲焼陶片、E類青磁碗片が出土している。



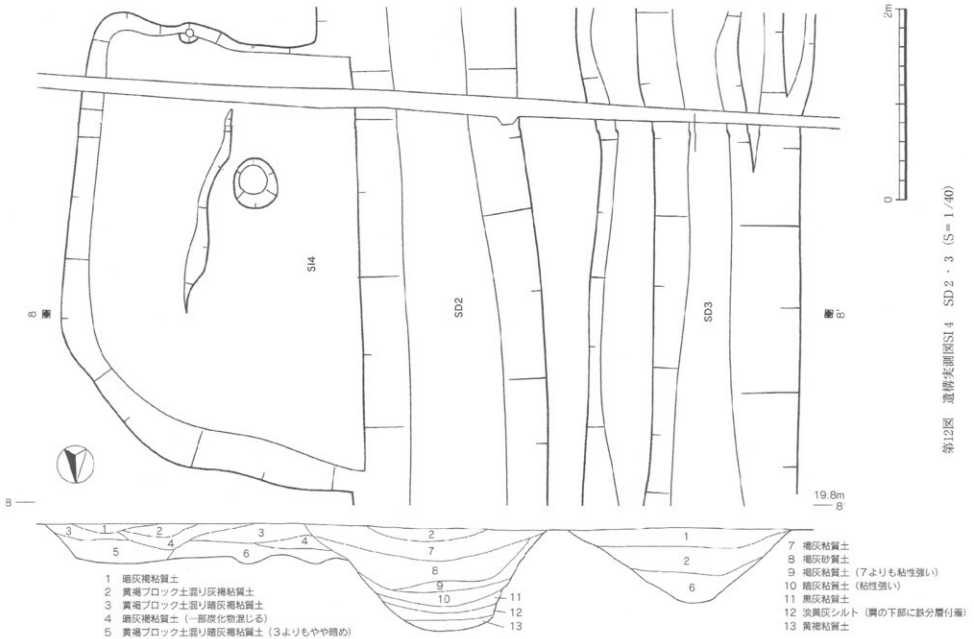
第9図　遺構実測図SB2・3・5（S＝1/40）



第10図　遺構実測図SB４・SA１（S＝１/40）



第11図　遺構実測図SI 1 ～ 3 （S = 1 /40）



第12図　遺構実測図SI4　SD2・3（S＝1/40）

SI5

SB１の範囲内でやや南寄りのグリッドC－６に位置する竪穴状遺構である。東西長280cm、南北長260cm、深さ52cmの長方形をした形状をする。SB１との前後関係はわからない。遺物は珠洲焼すり鉢、土師器皿、行火、鉄釘が出土している。時期は14世紀後半～15世紀前半である。

SI6

グリッドD－６、SI５の東隣に存在する。東西長242cm、南北長300cm、の長方形プランで、深さは50cmを測る。形状や深さ、規模などからSI５と同じ機能を有すると考えられる。遺物は16世紀前半を中心とする土師器皿が多く出土するが、瀬戸灰釉半碗及び縄文土器片、打製石斧なども見つかっている。

SI7

調査区中央やや北寄り、グリッドC－５のSD２とSD８との間にある竪穴状遺構である。東西長202cm、南北長182cm、深さ10cm前後の隅丸方形の形をする。遺物は出土していない。

SI8

調査区中央より東端のグリッドE－４・５に位置する。東側は後世のカクランにより滅失しており、全体の様相は不明である。南北最大長390cm、東西長260cm以上、深さ最深35cmの多角形の形状をする。内部には数段のテラスが設けられている。堆積土層を見ると、覆土は自然に少しずつ埋まっていったようで、全て埋まった後に掘立柱建物と思われる柱穴が改めて掘られている。遺物は15世紀前半の白磁皿、土師器皿が出土している。

SI9

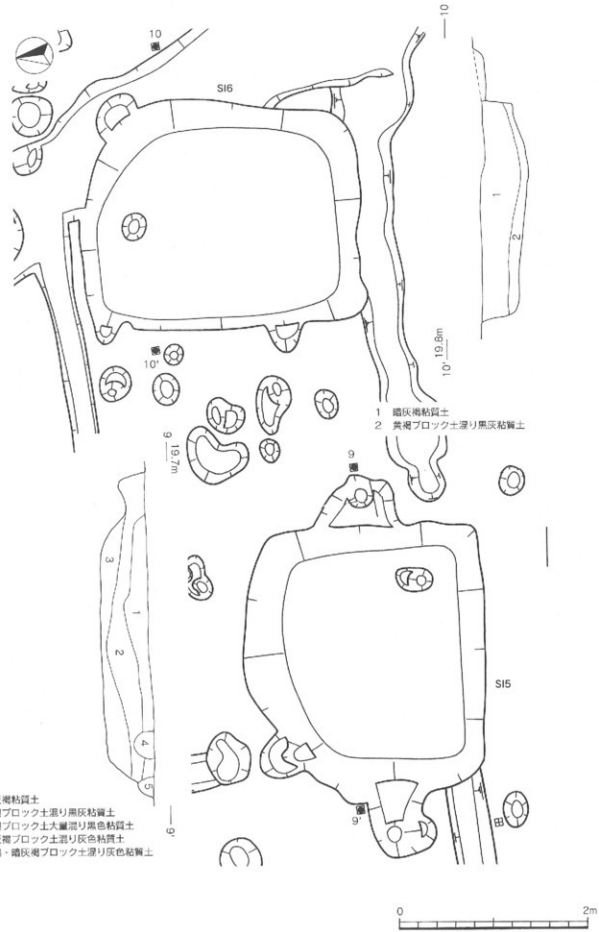
調査区中央からやや南西寄りのグリッドB・C－３に位置する。本遺構に対して東西溝SD15とSD16が分断するように走り、また、中央の一部には後世にカクランを受けているため、詳細なことはわからない。東西長325cm、南北長280cm以上の方形型をし、10～15cmの深さをもつ。遺物は粉砕された炉縁石の破片と瓦質火鉢片が見つかっている。時期は15世紀代と考えられる。

SI10

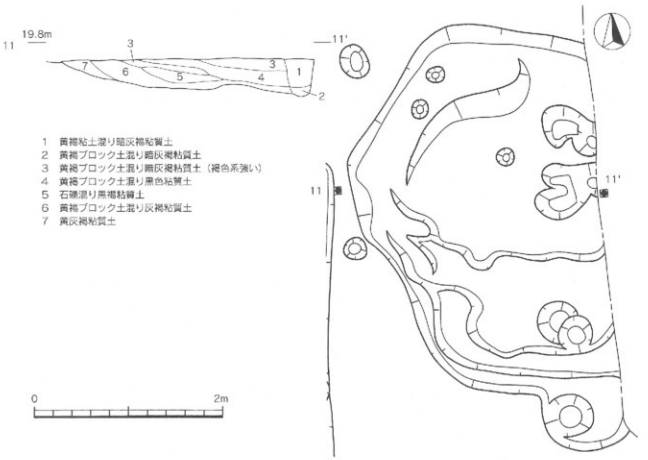
調査区中央から南東側、グリッドD－２・３の東西溝SD17の南隣に所在する。北側半分は後世のカクランを受けている。東西長264cm、南北255cm以上、深さ10cm前後の方形プランをしている。内部には直径40～50cmのピットが数基確認されている。古代の鉢と珠洲焼すり鉢片が出土している。

SE1

調査区北東端のグリッドE－６にあるSD11の南側で発見された。遺構の半分以上は調査区外となり、全体の様相はわからない。規模は直径122cm、深さ150cm以上の円形と想定される。北側の一部は後世の工場関連施設による基礎のためカクランを受けている。井戸枠は確認できず、素掘りプランと考えられる。遺物は炉縁石の残欠のみで、中世段階と想定できるが詳細時期はわからない。



第13図　遺構実測図SI5・6（S＝1/40）



第14図　遺構実測図SI８（S＝１/40）

SE2

調査区中央からやや南寄りのグリッドC－２に所在する。直径224cmの円形をしており、深さは80cm以上を測る。調査終了間際での掘削であったため完掘までには至らず、十分な図面も作成することはできなかった。覆土は中心部に黒色粘質土、周辺部に左記黒色粘質土と地山土と同質である黄褐粘質土が混在していた。この黒色土と黄褐土の混じった土が井戸枠裏込めの覆土にあたると考えられ、当初は井戸枠が存在していた可能性をもつ。遺物は出土しなかった。

SE3

調査区東南部のSK39の南隣、グリッドD・E－２に位置する。長径310cm、短径290cmの楕円形をしている。深さは130cm以上で、SE２と同様完掘まで至らなかった。埋土は上層に黒褐色粘質土、その下に地山土の一部が流れ込んだ黄褐粘質土の２層しか確認していない。土層の堆積状況から本井戸は素掘りの構造と考えたい。遺物は13世紀末～14世紀初頭の珠洲焼すり鉢、土師器片を確認している。

SK1

調査区北西隅のグリッドB－７、SD1とSI３の間に位置する。長径120cm、短径71cmの歪な楕円形をしている。深さは70cmである。周辺に同様の規模・深さをもった穴が３箇所存在し、均等に配置していることから柱穴になる可能性がある。15世紀前半と考えられる土師器皿１点が出土している。

SK2

グリッドC－６内のSB１とSD２の間に存在する。隅丸方形をしたプランと思われるが、SD２によって半分以上削平されているため細かい様相はわからない。南北ラインは248cm、東西ラインは100cm以上、深さ約15cmである。穴の中にはテラスや、一部に深くえぐれている箇所が見られる。遺物は砥石のほか土師器皿が見つかっている。

SK3

調査区中央北端、グリッドC－７のSD４とSD９に囲まれたところにある。長辺284cm、短辺119cm、深さ25cmの東西に長い長方形プランを呈する。遺物は砥石、青磁碗、土師器皿、珠洲焼すり鉢を確認した。時期は14世紀後半と思われる。

SK4

グリッドC－６内、SB１の北端をかすむような場所に位置する。歪ながらも方形に近い形状をしている。一辺は東西120cmと南北116cmで、深さは20～26cmを測る。覆土は暗灰褐色や灰褐色の粘質土が何層にもわたって堆積し、中・上層面の覆土からは炭粒や骨片が散在していた。骨は焼かれており、部位はわからないが全てが人骨であった。茶毘跡と推定されるが、焼土は確認されなかったので、茶毘に付した後必要なくなった骨などを捨てた穴とも考えられる。なお、東西を走るSD４よって一部滅失しており、完掘時には全体の状況を抑えることはできなかった。遺物は土器・陶磁器が全くなく、釘を中心とした鉄製品10数点や中国銭が出土した。

SK5

調査区のほぼ真ん中のグリッドC－5、東西溝SD7の中に見られる土坑である。東西82cm、南北66cm、深さ27cmの卵のような形をしている。覆土は炭粒が定量混じった黒灰色の粘質土である。遺物は16世紀前半の土師器皿2点出土している。

SK6

グリッドD－5内のSD7が東端で途切れるその隣に位置する。また、南北を走るSD4とは切り合っており、こちらの土坑の方が新しい。また、この穴は南北に長い長方形のような形に見えるが、実際は、2基の方形の穴が切りあい、当初は南側にあったものが、北側に移して掘り直していることが断面観察で確認できた。古い方の土坑の全貌は不明であるが、東西160cmの方形プランで12cmの深さであることまでは判明した。北側の新しい方の土坑は東西150cm、南北245cm、深さ23cmを測る長方形プランであった。遺物は土師器皿片を数点確認したが、時期を決定できるものはではなかった。

SK7

調査区北東部のグリッドD－7に位置する。東西溝SD11とは切り合っており、土層断面による新古関係ではSK7の方が新しい。形状は直径120cm前後の円形をしており、深さは42cmを測る。暗灰褐色粘質土主体の覆土がレンズ状に堆積しており、一部拳大の石が混じっている。遺物は土師器皿、青磁碗、鉄釘が出土している。時期は14世紀末～15世紀初頭である。

SK8

調査区北東部、グリッドD－6に位置する。2段のテラスを有した楕円形プランで、北西―南東ラインの長辺が219cm、北東―南西ラインの短辺が160cm、深さが100cmを測る。

深さ約60cm前後の層5・黄褐ブロック土混り黒灰粘質土内には京都系を中心とした土師器皿の一括廃棄が見られる。また、南北溝SD10が埋った後に掘られている。遺物は珠洲焼すり鉢、瀬戸焼鉄釉皿、砥石などが見つかっているがほとんどは土師器皿である。国産陶器と土師器皿3点は14世紀後半で、残りの土師器皿は16世紀前半のものである。

SK9

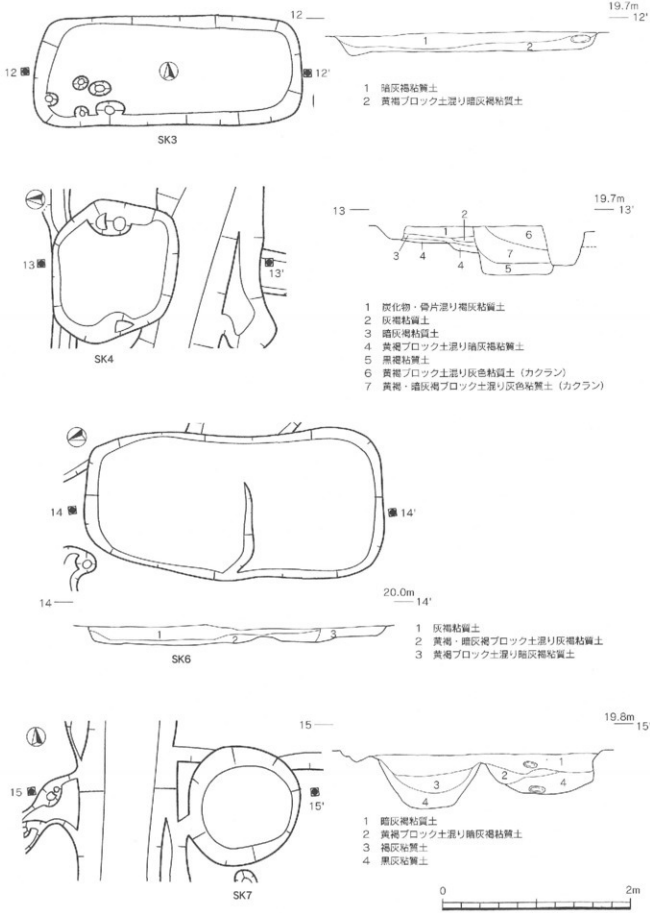
調査区北東部、グリッドE－6に位置し、東側半分は調査区外となる。西壁には一段のテラスをもち、歪な楕円形をしている。南北長120cm、東西長70cm以上、深さ23cmを測る。切り合いから西隣のSK10よりも新しく、SK11よりも古いことがわかっている。16世紀前半の土師器皿1点が出土している。

SK10

グリッドE－6内、SK9の西隣に位置する。南側半分はSK11が掘り込まれているため、詳細なプランはわからないが、北東―南西ラインが長い楕円形になると想定している。北東―南西長94cm以上、北西―南東ライン長162cm、最深部40cmである。遺物は出土していない。

SK11

調査区北東部、グリッドE－6に位置する。切り合いからSK9及びSK10よりも新しい。形状は歪な方形で、北東―南西長117cm、北西―南東長120cm、深さは26cmである。穴の中には長辺80cm、短辺55cm、深さ11cmのピットがある。遺物は土師器皿片と炉縁石の残欠が見つかっている。



第15図　遺構実測図SK３・４・６・７（S＝１/40）

SK12

調査区北東部のSK11より南西側のグリッドD－6に位置する。方形の土坑が2基重なっているような形状をしているが、土層の堆積状況を見る限りでは、単一の遺構と考えられる。南北長200cm、東西長200cm、深さ30cmを測る。遺物は出土していないが、この土坑の周辺から火葬骨片が散在していた。

SK13

グリッドD－5内、SK12の南にある円形の浅い土坑状遺構を隔てた箇所に所在する。南北に長い長方形プランをしている。南北長228cm、東西長140cm、深さ38cmである。土層5・黒灰粘質土や土層6・灰黄褐粘質土は自然堆積で、土層4・黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土は人為的に埋めたものと考えられる。16世紀前半を中心とした土師器皿が数点出土している。

SK14

グリッドE－6内、SK9～11の南方のSK12東側に位置する。四角形をしているが、南西側のコーナーは角っておらず丸みをおびている。穴の内部はテラスが入り組んだ状態で掘られ、深さも均一していない。平面プランや土層堆積から複数の穴が切り合っていた可能性がある。大きさは北東―南西長232cm、北西―南東長256cm、深さは最深部で43cmを測る。遺物は16世紀前半を中心とした土師器皿数点が見つかっている。

SK15

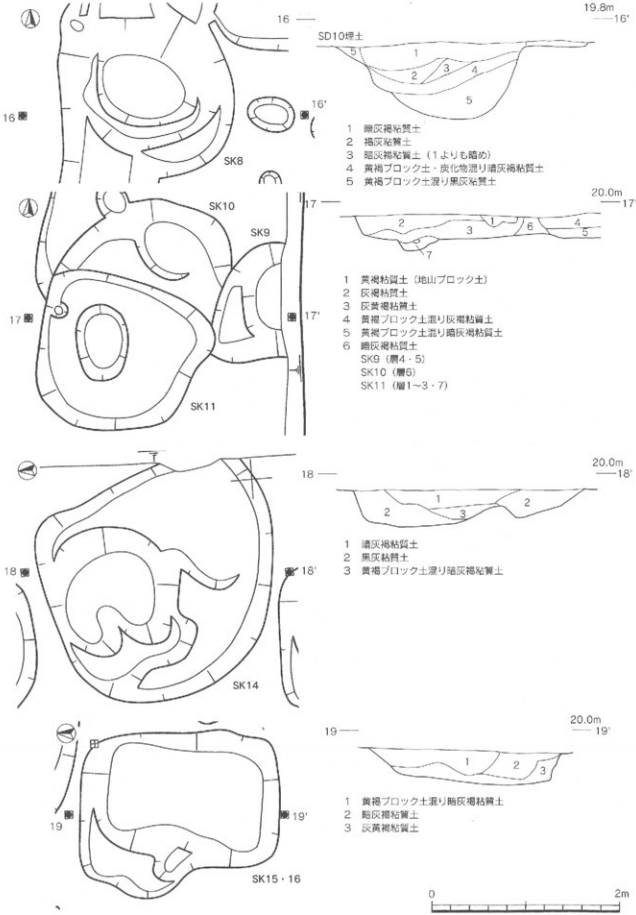
グリッドE－5内、SK14の南隣に位置する。平面プランは長方形に見えるが、後述するSK16と重複していることがわかっており、実際は一辺130cmの正方形プランと考えられる。覆土は層1の黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土のみで、深さは25cmである。遺物は鉄滓、土師器片、骨片が出土している。時期は不詳。

SK16

SK14の南隣に位置し、上記のとおりSK15とは切り合う。やや歪な方形プランをし、SK15よりも古いことが土層断面の観察から明らかになっている。南北長211cm、東西長144cm、深さ39cmを測る。堆積土は層2・暗灰褐粘質土と層3・灰黄褐粘質土である。遺物は確認していない。

SK17

調査区北東部、グリッドD－5のSK13より南側にある土坑である。SD4と切り合っており、前後関係はSK17が新しいと考えられる。南端は後世のカクランにより破壊されている。プランは南北に長い長方形と想定されるが、北東と南東コーナー部の角は取れて丸くなっている。南北長130cm以上、東西長133cm、深さ161cmである。また、この穴は地下式坑で、東方に横穴が掘られている。横穴は高さ約40cm、奥行きは50cm程までは掘削したが、まだ奥までのびている。崩落の恐れがあったためこの範囲で止めた。遺物は出土していない。



第16図　遺構実測図SK 8 ～11・14～16（S＝1/40）

SK18

調査区東側のグリッドE－5、SK17より更に南方に所在する。東西に長いくびれの弱い瓢箪形をしている。南北長70cm、東西長122cm、深さ19cmを測る。遺物は出土していない。

SK19

グリッドE－4とE－5にまたがり、SK18の南隣に位置する。正方形プランと考えられるが、南東・南西コーナーは角がとれて丸くなっている。南北長142cm、東西長138cm、13cmの深さを有する。遺物は出土していない。

SK20

調査区東側のグリッドD－4、SK23の北隣に位置する。北東—南西が長い卵のような形状で、長辺100cm、短辺90cmである。内部には帯状をしたテラスが設けてある。深さは最深部で32cmを測る。遺物は出土していないが、覆土内に焼土や炭化物が入り混じっていた。

SK21

グリッドD－4、SK20の東側に所在する。直径117cmの円形プランで39cmの深さをもつ。隣接するSK22とは切り合っており、土層観察からSK21の方が新しいことが判明している。遺物は14世紀の加賀焼すり鉢と鉄釘片2点出土している。

SK22

グリッドD－4とE－4とにまたがり、SK19の南西側に位置する。全体的に角があまい隅丸長方形の形をしている。南北長225cm、東西長109cm、深さ24cmを測る。遺物は出土していない。

SK23

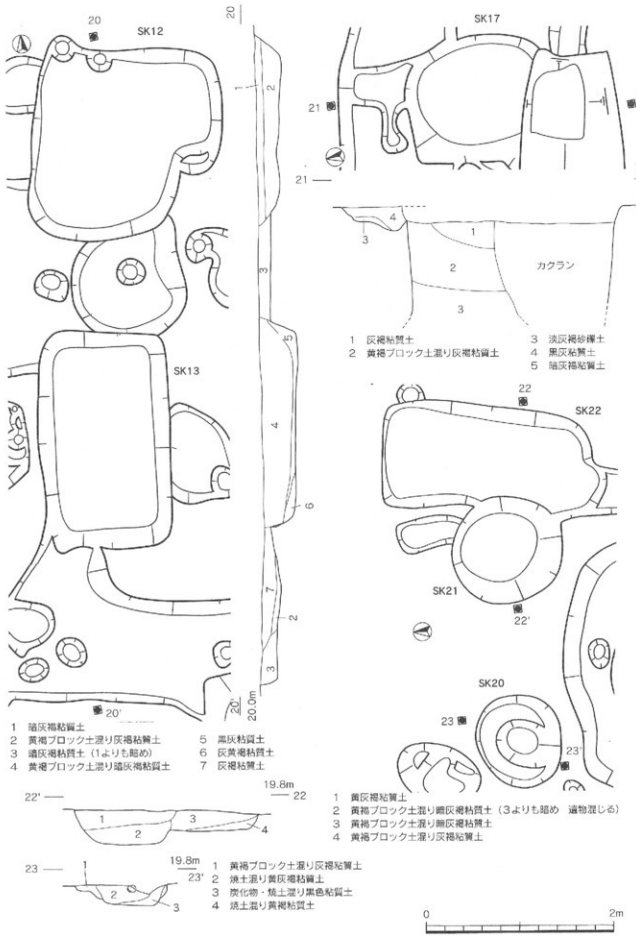
グリッドD－4内、SK20・21の南側に位置する。プランは歪な台形で、その中に楕円形をした穴が掘られている。外側の台形プランの大きさは北東—南西長319cm、北西—南東長286cm、深さ16cm。内側の楕円形は北東—南西長254cm、北西—南東長213cm、深さ30cmを測る。また、穴の底には直径50cmと30cmのピット2基が存在する。土層断面の観察から大きい穴が埋まった後に小さい穴を掘りなおししていることがわかった。縄文時代と推される磨石1点を確認している。

SK24

グリッドD－4内のSK23南側に位置し、そのSK23と本土坑との間には東西溝SD14が走っている。角があまく丸みを帯びている隅丸長方形をしている。南北長180cm、東西長133cmの大きさで、内部は数段のテラスが設けられている。最深部で51cmを測る。遺物は出土していない。

SK25

グリッドE－4内、SK24の東方に位置する。SK26・27、SD17と切り合っており、全体のプランはわからない。残存している南角の形状から隅丸方形プランと想定される。北西—南東長は120cm、北東—南西長は40cm以上、深さ30cmで穴はすり鉢状になっている。遺物は土師器皿片が3点見つかっているが、詳細時期はわからない。



第17図　遺構実測図SK12・13・17・20～22（S＝1/40）

SK26

グリッドE－４内のSK25南隣に位置する。土層の切り合いからSK25よりも古いことがわかっている。直径115cmの円形プランで、15cmの深さを有する。遺物は出土していない。

SK27

グリッドE－４内のSK25東隣にある。不定形ながら東西に長い隅丸長方形プランをしており、東西長186cm、南北長108cm、内部は両端にテラスがあり、中央には一辺100cmの隅丸正方形の穴が存在する。深さはテラスで100cm前後、正方形の穴で119cmを測る。遺物は土師器皿片多数と鉄釘１点が出土している。時期は16世紀前半である。

SK28

グリッドE－４、SK27の東隣に接している。西側半分はこのSK27によって切られており、全体の様相はわからない。プランは南北に長い長方形で、南北長130cm、東西長推定80cm、深さは13cmを測る。16世紀前半とされる土師器皿数点確認している。

SK29

グリッドE－４内、SK28南隣に位置し、土層断面の観察から左記土坑より古いことがわかっている。プランは一辺90cmの隅丸正方形で、14cmの深さをもつ。遺物は出土していない。

SK30

グリッドE－４内のSK27・28から北東側に位置し、本土坑南端にはSD14が接している。形状は東西がやや長い隅丸長方形で、穴の中は帯状のテラスや直径20～40cmの数基のピットが見られる。穴の中央には一辺60cm程の不定形をした未掘削の箇所が存在する。規模は南北長180cm、東西長200cm、深さはテラス部が８cm、最深部で29cmを測る。土師器皿片３点確認しているが、時期はわからない。

SK31

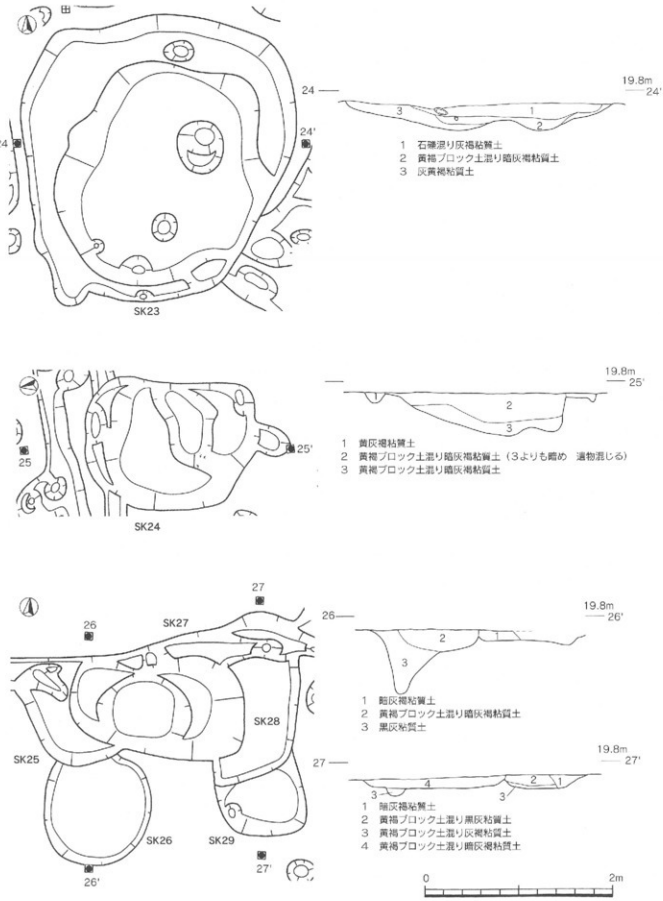
グリッドE－４、SK30の南東側に位置する。直径約160cmをした歪な円形をしている。内部は数段のテラスがあり、最も深い箇所で19cmを測る。遺物は出土していない。

SK32

グリッドE－４、SK31の南側に位置する。３基の土坑が重なっているような形状をしているが、前後関係は不明である。北西―南東ラインが最も長く、最大長は156cmで、穴の内部には２段のテラスと小穴が２基存在する。テラスの深さはそれぞれ16cmと20cm、穴の深さは25cmである。16世紀中頃のB－Ⅳ'の青磁碗1点が出土した。

SK33

グリッドD－４、SK24の南側に位置し、東西方向のSD３に接する。SD３との前後関係は不明である。大きさは直径80cmの円形をしており、深さは115cmで、北方向に横穴が存在する。SK17と同様地下式坑と考えられるが、崩落の恐れがあるため、横穴部は30cm程掘削した段階で取りやめた。遺物の出土はない。



第18図　遺構実測図SK23～29（S＝1／40）

SK34

調査区南東部のグリッドE－3、SD3とSD17との間に存在する。東西に長い不定形なプランで、中央部には後世に構築したコンクリート擁壁が横断している。南北長146cm、東西長220cm、深さは24cmである。覆土は暗灰褐粘質土1層である。瀬戸後期の灰釉折縁深皿破片1点と16世紀前半の土師器皿1点が見つかった。

SK35

SK34から南方、東西溝SD17を超えたグリッドE－3内に位置する。円形プランをしており、直径180cm、深さ89cmを測る。14世紀代の土師器皿片1点を発見している。

SK36

調査区南東部のグリッドD－2、南北溝SD2と後述するSK37との間に位置する。南北に長い隅丸長方形で、南北長24cm、東西長180cm、深さ24cmを測る。遺物は14世紀代の土師器皿1点が出土している。

SK37

グリッドD－2内、SE3の北西隣に位置する。南北に長い隅丸長方形であるが、南東・南西コーナー部は角がとれて、円形に近い形状をしている。北側には4段のテラスが設けられており、5・7・35・60cmの深さを有する。南北長380cm、東西長290cm、深さ98cmの規模をもち、覆土内には遺物と人頭大の石礫が多数出土した。遺物は土師器皿多数、珠洲焼すり鉢、越前焼甕、砥石、行火、炉縁石など多岐にわたり出土した。時期は16世紀前半と推される。

SK38

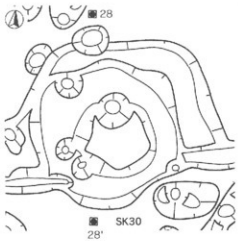
グリッドD－2、SE3の南隣に接する。この井戸SE3によって北側4分の1がなくなっている。隅丸方形と想定しているが、全体の様相はわからない。内部には2段のテラスがある。北西—南東長119cm、北東—南西長90cm以上、深さがテラス部で10、20cm、最深部74cmを測る。遺物の出土はない。

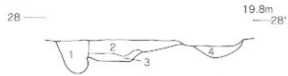
SK39

調査区南東隅のグリッドE－1、SD20とSD21の間に位置する。形状は不定形で、一部にテラスを有する。中央部にはさらに長辺74cmの穴が掘られている。北西—南東長188cm、北東—南西長122cm、深さがテラス部で15と66cm、基底部で41cm、中央部の穴の深さが50cmである。穴の中から火葬骨数点と土師器皿片多数、鉄釘・砥石各1点が見つかった。時期は14～15世紀前半と推定する。

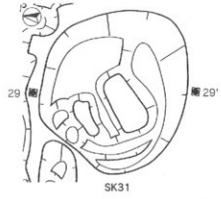
SK40

調査区南端、グリッドC－1に位置する。北半分は後世のカクランにより滅失している。プランは歪な隅丸方形で、北西—南東ラインが222cm、北東—南西ラインが160cm以上、深さ25cm前後を測る。土師器甕4点出土しており、8世紀中頃と思われる。竪穴建物の可能性もある。

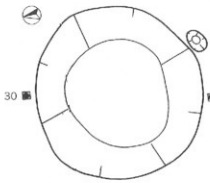


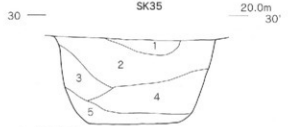


1 暗灰褐粘質土
2 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土
3 黄灰褐粘質土
4 暗灰褐粘質土



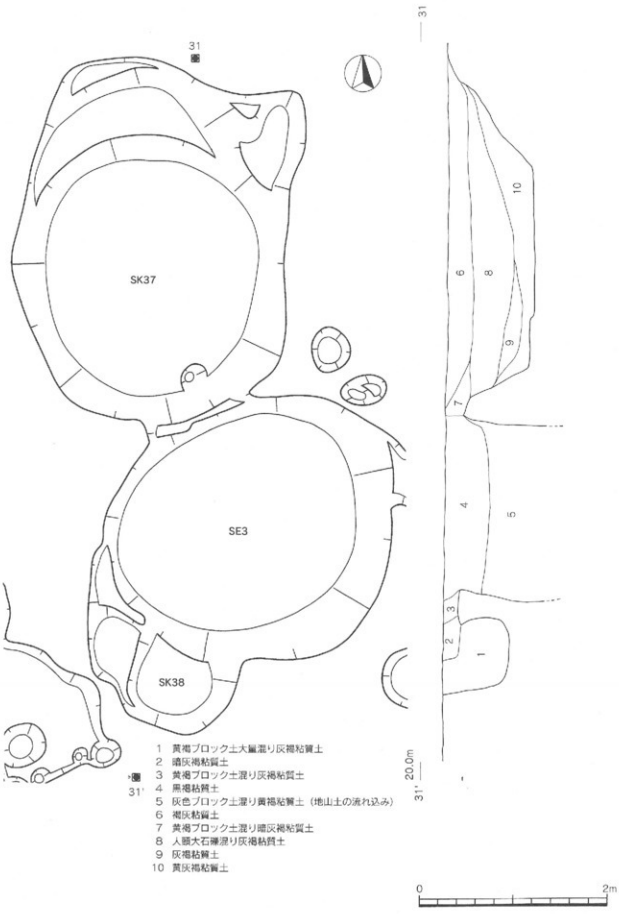
1 黄褐ブロック土混り暗灰褐粘質土
2 黄灰褐粘質土
3 灰褐粘質土





1 褐灰粘質土
2 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土
3 灰褐粘質土
4 黄褐ブロック土混り灰褐粘質土（2よりも黄色が強い）
5 黒色ブロック土混り灰褐粘質土

第19図　遺構実測図SK30・31・35（S＝1/40）



第20図　遺構実測図SE３　SK37・38（S＝１/40）

SD1

調査区北西隅、グリッドA・B－7に位置する。方向は北西—南東ラインである。調査区西端から13m東方へ進むと、SD2の手前で進路が北向きに変わりそのまま調査区外へとのびていく。幅は90～100cm、深さは約15cm、溝内の高低差は、SD2と並行する南北ラインの方はやや高く、北西—南東ラインの方より約10cmの差がある。遺物は16世紀前半の土師器皿と14世紀代の越前焼甕、珠洲焼甕片が出土している。

SD2

調査区を南北方向に走る大溝である。調査区北端から南方へ25m進むと、進路は一度東方に変わる。そこから15m程進むと再び南方にクランクし、約40m走ってそのまま調査区外へとのびていく。溝幅は調査区北側グリッドB－5～7の南北ラインで200～240cm、調査区中央部グリッドB～D－4・5の東西ラインで約220cm、調査区南側グリッドD－1～4の南北ラインで150cm前後となり、南側の南北ラインでは幅が若干狭少する。深さは、北側南北ラインから中央部東西ラインにかけては90～100cmで、南側南北ラインは60～90cmである。特に調査区を南に進むに連れて浅くなる傾向にある。溝の底は調査区南端が19.18m、北端が18.39mと80cmの高低差があり、南から北へゆっくりと下っている。また、調査区北側の南北ラインについては直線ではなく、やや西方に出っ張って弧を描いている。土層断面を観察すると、複数の土が堆積していることから、ゆっくりと時間をかけて埋まっていったと考えられる。遺物は土師器皿、瀬戸・越前・珠洲焼などの陶器、青磁・染付の中国製品、炉縁石などの石製品、鉄釘など多岐にわたる。陶磁器は一部の染付や瀬戸焼の大窯製品を除くとそのほとんどが15世紀代のものである。土師器皿については14・15世紀のものが少なく、16世紀前半が多い。

SD3

調査区を東内に走る大溝である。調査区西端から東方10mで南方を直角に折れ曲がる。そこから18m進んだところで再び東方にクランクし、33m走ったその先は調査区外へとのびていく。溝幅は調査区西端グリッドA・B－5・6の東西ラインで180～200cm、直角に曲がって南北ラインとなるグリッドB－4・5の箇所で200～250cm、再びクランクしてグリッドB～E－3・4の東西ラインで160～280cmを測る。深さは調査区西端からの東西ラインとクランクしての南北ラインが50～75cmで、南北ラインから再び東西方向となる箇所では60～105cmである。特に、SD2と交差するあたりは100cmを越え最も深い。溝の底の高さはグリッドB－4の南北ラインから東西ラインに向きが変わる辺りが最も高く、標高19.15mを測る。これより調査区東と西端のレベルはそれぞれ18.99mと18.70mで少しずつながら深くなっている。土層断面からこの溝には常時水流は流れていなかったようである。遺物はSD2と同様多岐にわたる。土師器皿、瀬戸・越前・珠洲・加賀焼の国産陶器、青磁・白磁の中国製品、石臼などの石製品、鉄釘などが挙げられる。時期は14世紀後半～15世紀前半が主体となる。なお、瀬戸焼については花瓶の出土が目立つ。

SD4

グリッドC～E－5～7の調査区中央より北側に位置する。調査区北端から南東方向に走り、途中SD5やSD9と交差する。SD10と交わった辺りから東西方向に向きが変わり調査区東端へと突き進む。幅は90～120cm、深さは10～20cmである。底のレベルは、一部で20cm程深くなる箇所はあるが、顕著な高低差は見られない。遺物は土師器皿片が数点と鉄釘2点見つかっている。時期を決定できる遺物は出土していないが、他の遺構の切り合いから14世紀後半と推定する。

SD5

グリッドC・D－６、SD４の南に位置する東西溝である。大溝SD２から派生し、東方10m進んだところでSD４及びSD９と交差する。幅80～100cm、深さ約40cmである。SK４とは切りあっており、第15図の遺構平面図ではSK４が新しい図示をしているが、実際はSD５の方が新しいことが土層堆積から明らかになっている。遺物は16世紀前半までの土師器皿約30点、珠洲焼すり鉢、越前焼壺、鉄釘が各１点出土している。

SD6

グリッドC・D－６内、SD５から１m程南下したところにある東西溝である。SB１の中を横断するが、両者の時期的前後関係はわからない。溝の長さは８m、東端でSD４とぶつかる。幅は30～50cm、深さは10～15cmを測る。遺物は見つかっていないため詳細な時期はわからないが、土層からSD４とは同時並存していたと思われる。

SD7

SD６から南へ６m下ったグリッドC・D－５内にある東西溝である。西端は大溝SD２の際からで、東方へ11mまで続いている。溝幅60～100cm、深さ10cm前後を測り、途中、SA１やSK５に切られている。遺物は、溝底から土師器皿180が１点のみ完形で出土しており、時期は14世紀後半に位置付けられる。

SD8

グリッドC・D－５、SD７の南際から派生する。SA１東端の起点からは北西―南東方を向いているが、すぐに緩いカーブを描いて東西方の向きへと変わっていく。東端はSD10とぶつかって終焉する。幅は90～140cm、溝内部にはいくつかの段差が設けられており、深さは10～40cmを測る。出土遺物は加賀焼甕、炉縁石の残欠数点である。

SD9

グリッドD－６・７内の調査区北端から南へ向かって走る溝である。全長８mで、南端ではSD４とSD5が交差する。切り合いからSD４よりも新しい溝であることが判明している。溝の際や底には複数の穴やテラスがあり、SD10のような直線的な掘り方をしていない。幅は140cm前後、深さは10～25cmを測る。遺構の様相からSD５とは連結すると推定される。越前焼甕体部片を確認している。

SD10

SD９から３m東に進んだグリッドD－５～７のところにある。全長は24m、調査区北端から南下してSD２とぶつかる。途中、SK８・SD４・SD８・SD11と交差し、土層や遺物出土状況などからSD４よりは新しく、SK８・SD２・SD11よりも古いことが判明している。SD８とは同時並存と考える。溝幅は100cm前後、深さは40～50cmで、底の高低差はほとんどない。遺物は土師器皿、加賀焼鉢・甕、珠洲焼すり鉢などの土器・陶磁器のほか砥石・炉縁石・宝塔などの石製品、焼骨が出土している。時期は14世紀後半から15世紀中頃と推定される。

SD11

調査区北東隅、グリッドD・E－７にあり、西端はSD10との分岐点からで、東方７mで調査区の外にのびていく。幅は120～130cm、深さ30～40cmを測る。土層断面により切り合いをもつSK７よりも古いことがわかっている。遺物には瀬戸焼の花瓶（200）、青磁碗（201）が見つかっており、時期は15世紀代と考えられる。

SD12

調査区東側のグリッドD・E－５、SD４より１m南下したところに位置する東西溝である。所々後世のカクランにより滅失している箇所がある。全長13m、幅30cm前後、深さ５～20cmである。遺物は出土していない。

SD13

グリッドE－５内、調査区東端のSD12から分岐する南北方向の溝である。北端は調査区に外にのびていく。全長３m、幅30～40cm、深さ10～30cmを測る。SD４とは切り合っており、この溝の方が新しいことがわかっている。SD12とは同時期に並存したと考えられる。出土遺物は確認されていない。

SD14

グリッドA～E－４、調査区中央を横切るように走る溝である。方向はやや北に傾く東西ラインで、一部途切れている箇所があったり、大溝SD２やSD３など他の遺構の掘削によって状態がわからなくなったりするところがある。全長は40mで東と西の両調査区外にそれぞれのびていく。幅は30～50cm、深さは５～10cmで、遺物は発見されていない。

SD15

グリッドB・C－３・４内、SD３が南北方向から東西方向にクランクする箇所より派生する溝である。やや南に傾きをもつ東西溝で、東端は南北方向をもつSD２までと想定されるが、カクラン坑によって滅失しており、実態はわからない。全長は推定16m、幅は58～80cm、深さ5～25cmで、遺物は出土していない。

SD16

SD15から約60cm南下したグリッドB・C－３内のところに位置する。溝はSD15と並行する東西ラインで、全長14m、幅60～80cm、深さ10cm前後を測る。SD15とは長さ、幅、深さ共に均一しており、同機能をもっていたと考えられる。遺物は出土していない。

SD17

調査区南東部、グリッドD・E－３にある東西溝である。SD2から派生し、そのまま調査区東外へとのびていく。一部後世のカクランにより滅失している。全長16m、幅110～200cm、深さ40～50cmである。溝内での高低差は見られない。遺物は土師器皿と縁石残欠が数点と鏑蓮弁を有するB類の青磁碗１点が出土している。14世紀後半の時期と考えられる。

SD18

調査区南側、グリッドB・C－2にある東西ラインの溝である。SB4の中を横断しており、土層断面からSB4の後にこの溝が機能していたことがわかっている。東端はSD2の際からで、そこから西方11mまで進むと、北にクランクする形状を示す。北方へは1m程で終わる。幅は25～50cm、深さ10cm前後である。遺物は出土していない。このような鉤型をした形は一角の場所を区画する目的と想定できる。

SD19

調査区南東隅、グリッドE－1・2に位置する。溝はロの字をした方形になって巡ると考えられるが、その半分が調査区外となるため詳細はわからない。また、一度改修した痕跡が伺えられ、西辺にあたる南北ラインの長さは340cmから520cmに大きく拡張していることが土層堆積からわかっている。幅は40～60cm、深さ40～50cmである。遺物は出土していない。なお、この溝についての性格は不明である。

SD20

調査区南東隅のグリッドE－1で、SK39の西隣に位置する北西—南東ラインの溝である。南端は調査区外にのびていく。全長460cm以上、幅20～30cm、深さ10cm前後で、遺物は出土していない。

SD21

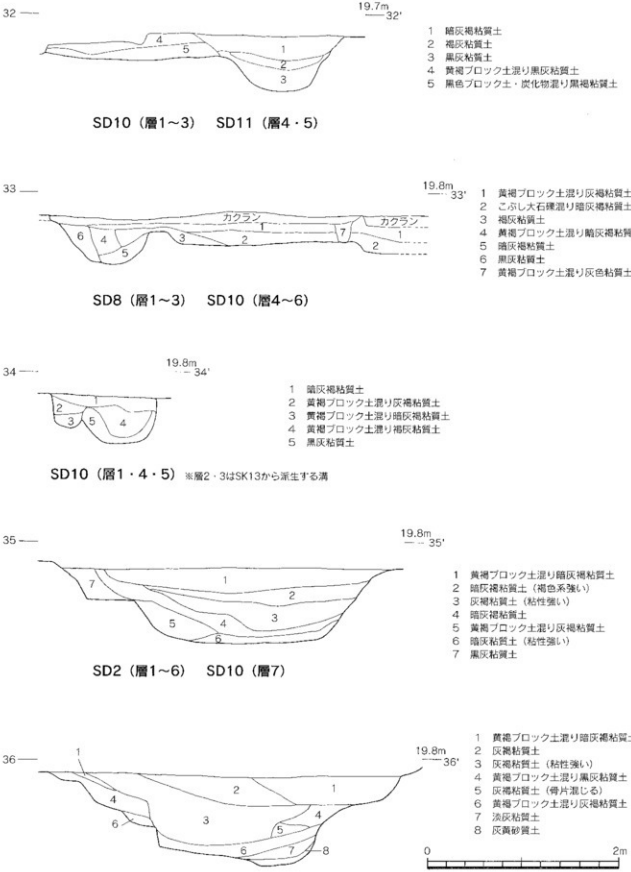
グリッドE－1内、SB5とSK39の間に位置する。北西—南東方向をもち、南端は調査区外へとのびる。幅は30cm、深さ10cmを測る。遺物は出土していない。SD20とは規模や方向が一緒なことから同種のもので、畑作の耕作溝と考えられる。また、その溝の脇にあるSB5も同一の方角を向いており、関連性が高いと想定される。遺物は出土していない。

SD22

調査区北西部、グリッドB－3～7に位置する南北溝である。全長25m、幅30～90cm、深さ5～15cmである。本報告では図示しなかったが、中から近世陶磁器が大量に出土した。覆土は灰色粘質土で、時期は19世紀が主体となる。

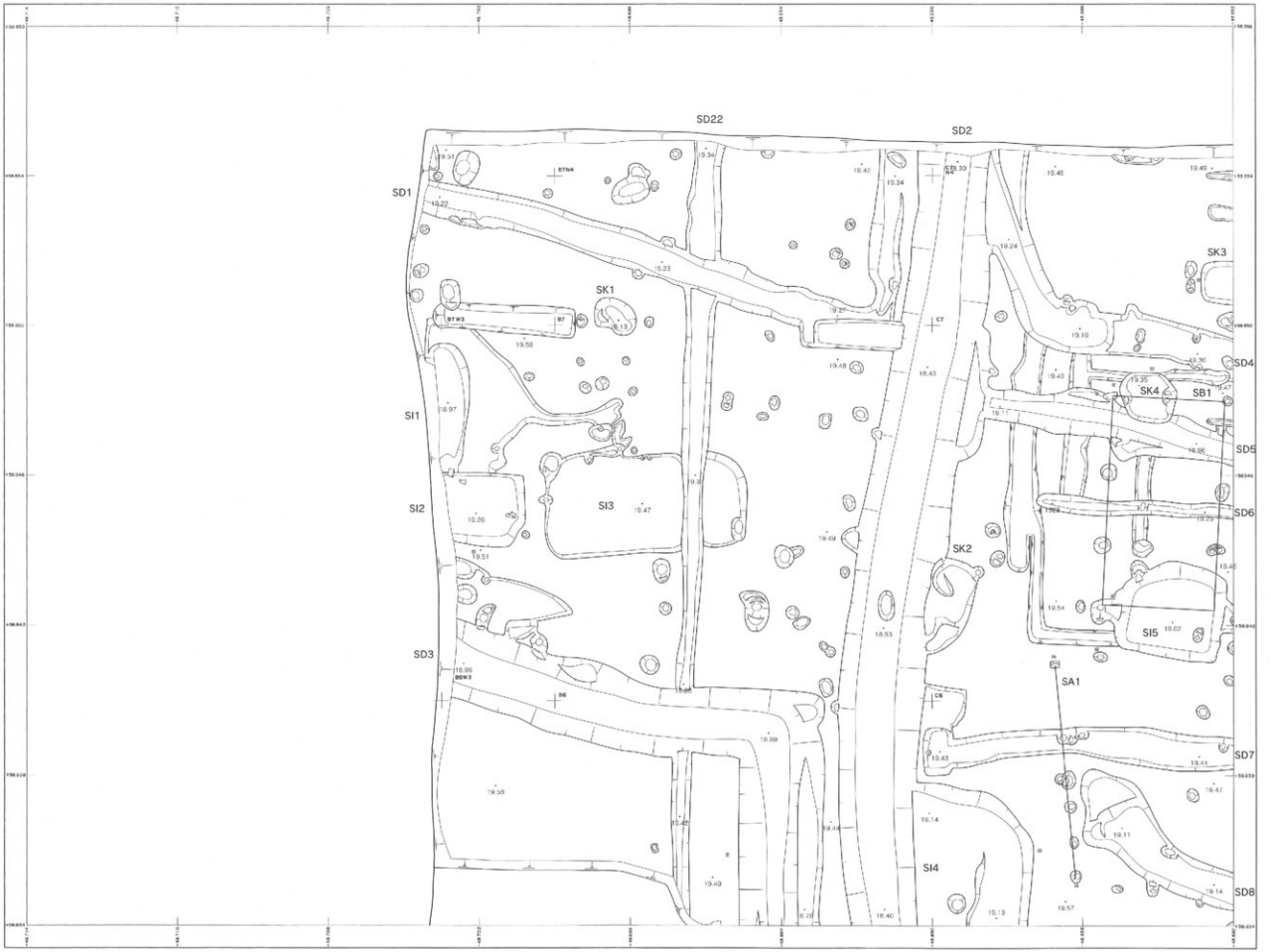
SD23

SD22と並行する南北溝で、グリッドB－4・5にまたがっている。中央部で一度途切れ、全長13.5m、幅25～40cm、深さ10～20cmを測る。遺物は出土していないが、覆土が近世段階の灰色粘質土のためSD22とは近い時期と考えられる。

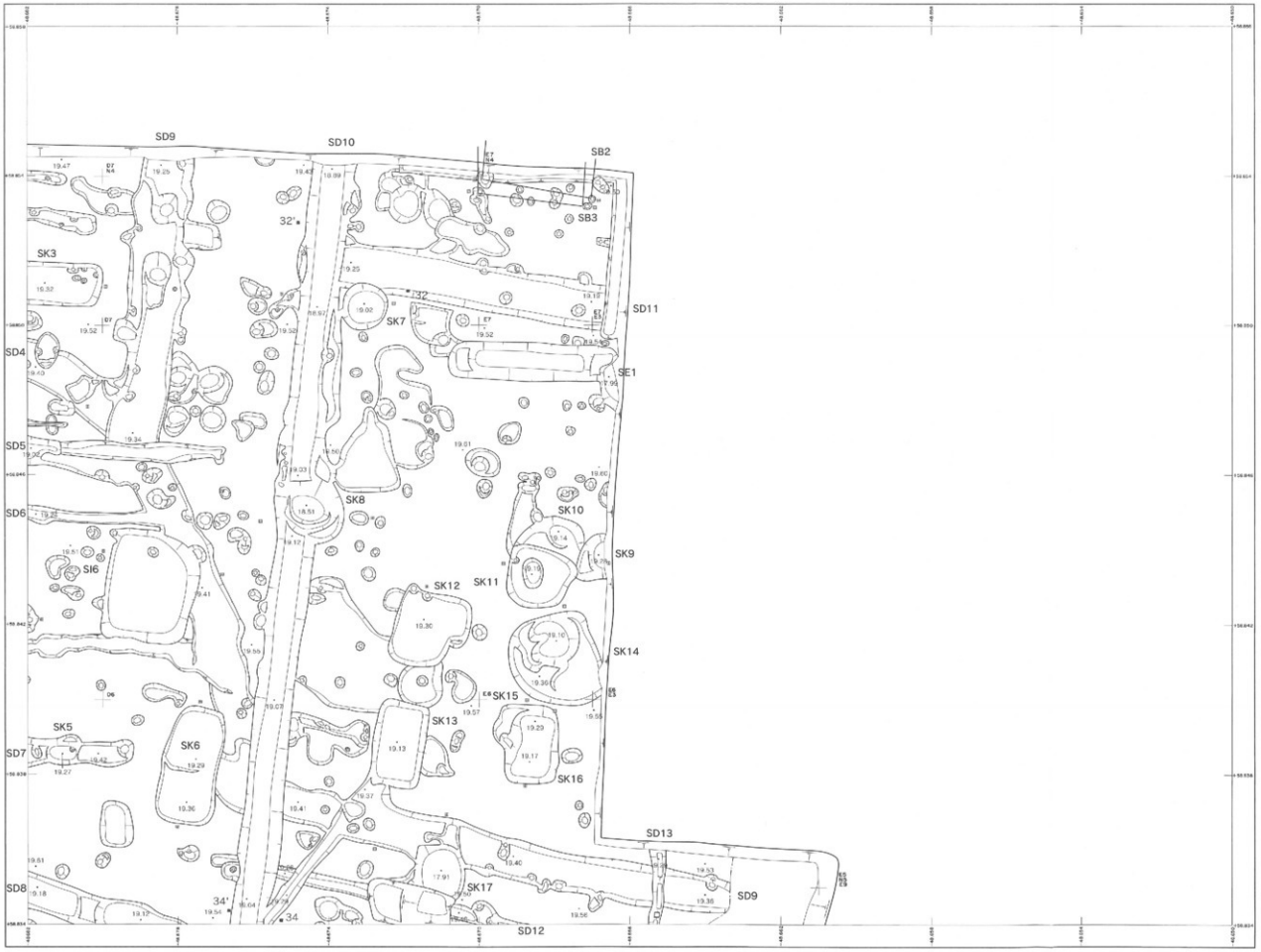


第21図　SD上層断面図（S＝1/40）

1	2
3	4
5	6



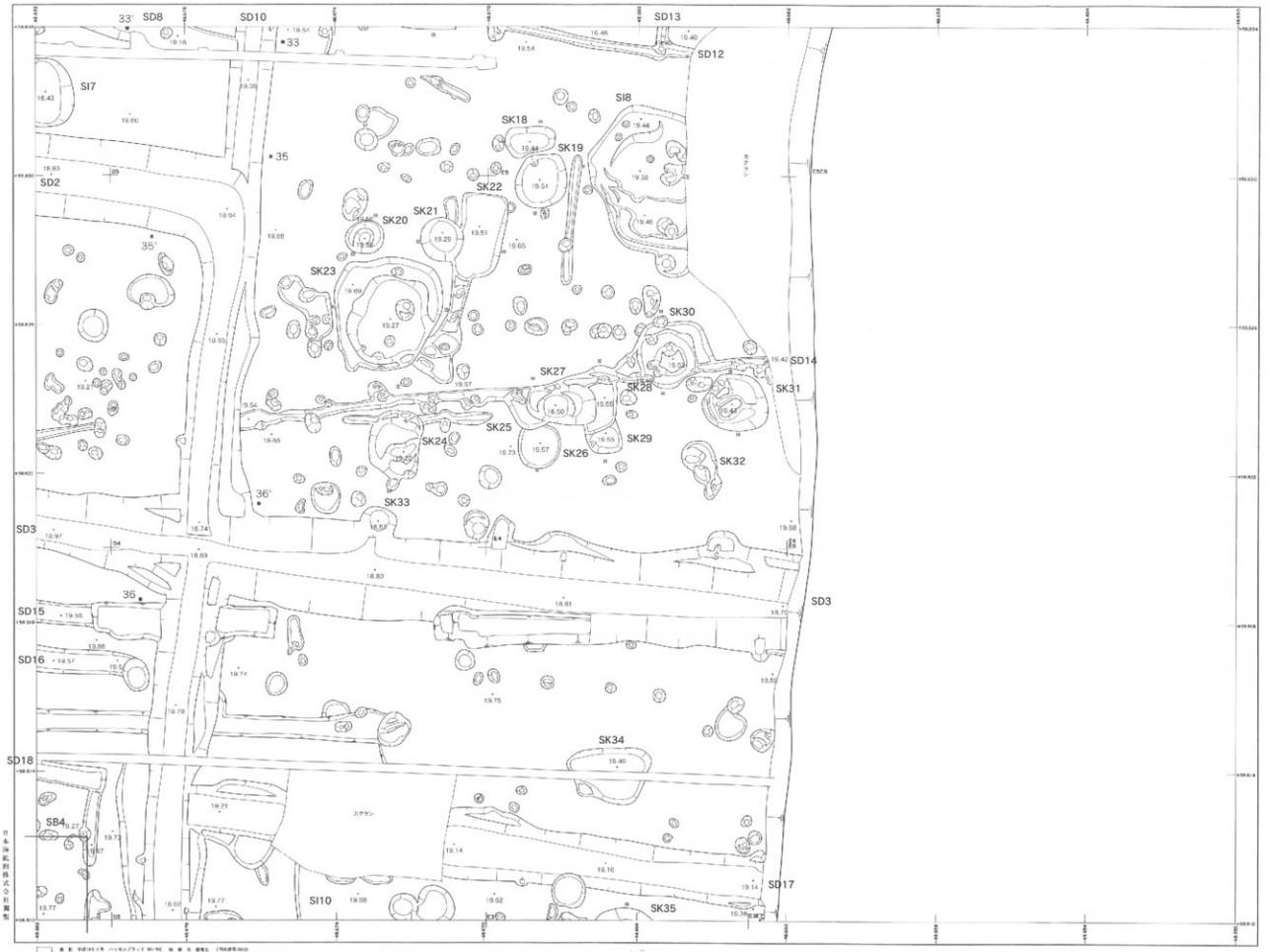
第22図　平面遺構図No. 1



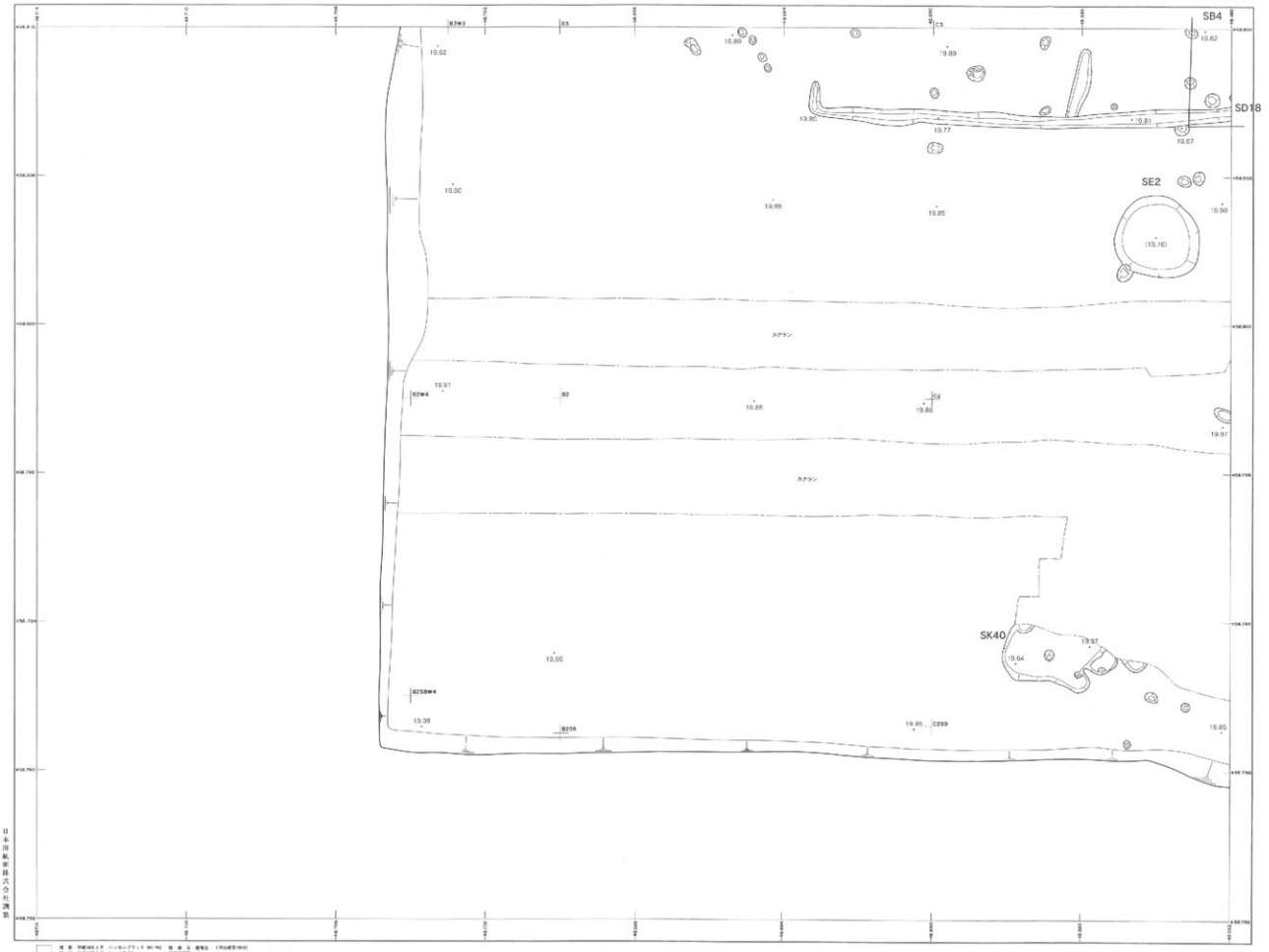
1 : 100

第23図　平面遺構図No. 2

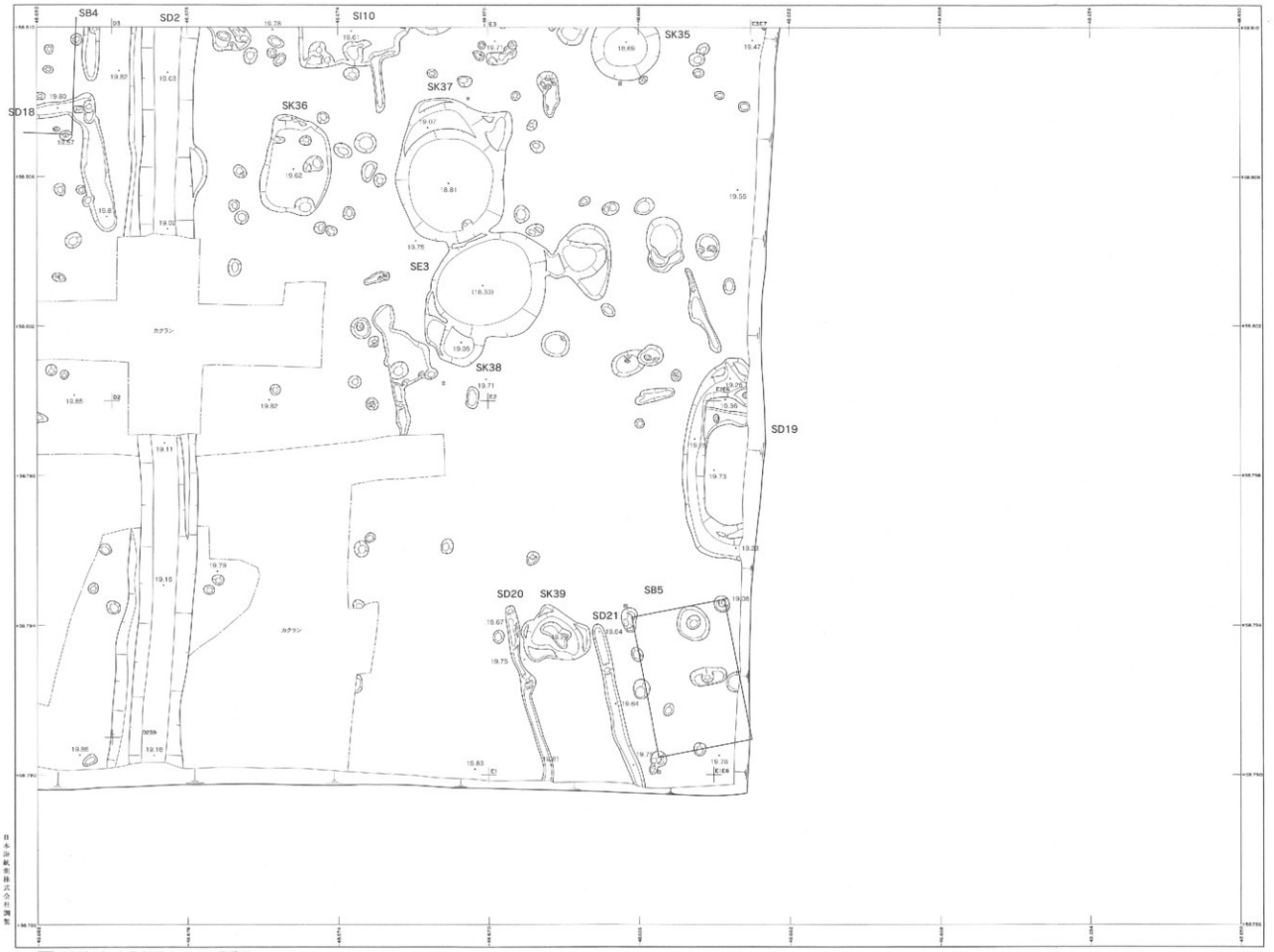
第24図　平面遺構図No. 3



第25図　平面遺構図No. 4



第26図　平面遺構図No. 5



第27図　平面遺構図No. 6

第4節　遺物

出土遺物については、縄文時代、古代、中世、近世の4時期のものが出土している。

縄文時代については土器片及び打製石斧、磨石など石製品が数点程度である。

古代においても、SK40から8世紀中頃の土師器甕4点まとまったもの以外は目立った遺物の出土はない。遺構検出段階で土師器、須恵器の破片を確認した程度である。

今回の調査で最も多かったのは中世の遺物である。そのほとんどは14～16世紀の中世後半にあたり、富樫氏が守護として活躍した時期と重なる。内容については土師器、国産陶器、中国製磁器、行火・炉縁石・砥石などの石製品、釘などの鉄製品などが挙げられる。

土師器の機種は皿のみで、地元で受け継がれてきた在地産と都の影響を受けた京都系がある。国産陶器は加賀・珠洲・越前・瀬戸・美濃焼がある。加賀・珠洲・越前焼の器種は甕・壷・すり鉢が主で、瀬戸・美濃焼については天目茶碗・花瓶など茶道具、供献具類が目立つ。また、中国製磁器は白磁・青磁・染付の3種類があり、器種は碗、皿が多い。この碗・皿は日常の食膳具の中心容器となる。碗は飯を中心とした主食用に使用し、皿はおかずを盛るのに使われる。

石製品では行火・炉縁石といった暖房器具、鉄製品など工具を研いだ砥石、信仰対象となる石塔が挙げられる。

鉄製品についてはほとんどが釘であった。その他、人骨片がSK4やSD3、SD5、SD10から見つかった。骨はすべて焼かれていた。

遺物の出土量は約4,000点で、コンテナ箱は17箱となる。うち、7割は中世土師器皿で、残り2割強が中世陶磁器、1割弱が石・鉄製品などである。

主要な遺物については、第28図～第40図にかけて実測図を掲載した。図については計測が可能なものを最大限抽出し、押印文など特殊なものがある箇所については拓本などを使って掲載した。以下、図中の主要なものについて説明する。

1・6～10はSI1～SI5出土の土師器皿である。

土師器皿は食器、供膳具など多岐にわたっての利用があり、この時期では供献具にも多く使用される。また、口縁端部に灯芯油痕が付着するものは、灯明皿に使用したものである。

1は小型の平底で、口縁端部を一段ヨコナデするAタイプである。6は口縁部が外反するEタイプである。7もAタイプである。平底ではあるが、底部から体部にかけてやや丸みをもつ。8は6と同様口縁部が外反し、体部下半は一段の稜をもつEタイプである。器形全体が歪んでおり、口縁の一部に工具による刺突の痕跡が見られる。これらの土師器皿は在地系で、時期は14世紀後半～15世紀前半に位置付けられる。

12はSI5出土の珠洲焼すり鉢である。すり鉢は穀物を粉にするための容器のことである。12のすり鉢は幅の広い櫛歯原体で、11本の卸目をもつ。外底部には静止糸切りの痕跡が見られる。器体はわずかにふくらみをもつ。14世紀後半頃と思われる。

13もSI5出土の行火である。行火はブロック状の石を刳り抜き、中に木炭を入れて使用する移動式簡易暖房具のことで、バンドコとも呼ぶ。13の行火は底のコーナー部にあたり、高さ2cm程の脚がつく。

SI6出土の15の土師器皿は、口縁端部がつまみあがっている。口縁部全体に灯芯油痕が付き、体部の所々で剥離が見られる。灯明皿としての利用が顕著であったことが伺える。なお、この土師器皿と14の土師器皿とは同一の可能性がある。16世紀前半頃と考えられる。

20はSI6出土の打製石斧である。打製石斧は石鍬とも呼び、縄文～古墳時代にかけて使用された土掘り道具のことである。20の打製石斧については中央部から折れており、外湾型の刃部しか見つかっていない。使用中に破損したかもしれない。

25～27はSE３出土の珠洲焼すり鉢である。25は13世紀代と考えられ、口縁は外傾で端部の内端を爪状に仕上げている。器体はわずかにふくらみをもって立ち上がる。卸目は５本以上で、割れ口の一部に漆接ぎの痕が見られる。漆接ぎとは、破損した容器の割れ口に漆を塗布して接着させることで、その容器自身を再利用させる役割をもつ。

SK1出土の29とSK7出土の43の土師器皿は口縁端部をヨコナデするAタイプで、底が丸みを帯びる。7と酷似し、15世紀前半と思われる。

SK3出土の33とSK７出土の44は青磁碗である。タイプは無文で口縁端部が外反するD類で、14世紀後半に位置付けられる。

40、41の土師器皿はSK5から見つかっている。40は15と同じ口縁端部がつまみ上がる形状を示している。41はFタイプの土師器皿である。このタイプは口縁部に一段のヨコナデを施し、体部の開きは大きく、薄手で端正に仕上げる。一般的に京都系とされている。なお、15や44のような口径の小さい土師器皿は、器壁が厚手で在地の名残が大きいが、口縁端部の使い方などに京都を意識した手法を用いている。両土師器皿については16世紀前半に位置づけられる。

SK7出土の45は基部から刃部にかけて幅が広くなるタイプの打製石斧である。最大長が10cm強とやや小振りで、刃部は使用したため一部欠損する。基部及び刃部は円型をしている。

49～71はSK８出土の土師器皿である。49～54は在地系である。49～51はEタイプ、49は平底で、50・51の底は若干丸みがある。52～54は平底のAタイプである。時期は14世紀後半～15世紀前半と思われる。55～71は41と同様京都系のFタイプの大皿に位置づけられる。これらの皿の特徴として、ヨコナデの幅が口縁端部から約２～2.5cmと広めで、外反がはっきりしているものとそうでないもの２タイプ見られ、かつ底部は丸底であることなどが挙げられる。外反のしっかりしているものは、ヨコナデの稜線も明瞭である。法量については、器高は１点のみ３cmで、その他は2.5cm前後と均一する。口径は11.8cmと16.4cmの各１点を除くと、12.7～14.8cmの中に全て収まる。さらに、この中から12.7～13.1cm、13.5～13.6cm、14.0～14.2cm、14.4～14.8cmと細分できるが、あまり明瞭ではない。これらの時期は16世紀前半頃と推定する。

SK９とSK10出土の72・73の土師器皿もFタイプの大型品である。74はFタイプの小型品で、15・40と同じ口縁端部がつまみあがる。口縁部には灯芯油痕が全面に貼りついており、灯明皿として使用されていたようである。

SK21出土の78は加賀焼のすり鉢である。卸目は8本。内面体部上半には記号による刻文が認められる。時期は14世紀代と考えられる。

SK27出土の土師器皿80は京都系Fタイプで16世紀前半、SK28出土の土師器皿81は在地系Eタイプで15世紀前半頃と推定される。

SK32から出土した82は鎬蓮弁を有するB－Ⅳ´類の青磁碗である。鎬蓮弁は剣頭が蓮弁としての単位を意識しないで施されている。時期は16世紀前半である。

SK34から出土した83は小型土師器皿で、口縁端部がつまみあがっている。器壁は薄めで、底は丸底である。16世紀前半頃である。84～87はSK37から出土した土師器皿である。85・87は口縁端部がつま

みあがっており京都の影響を受けているが、器壁は極めて厚く、京都の技法を意識しつつも在地色の方が強いタイプといえる。なお、85と87は同一個体の可能性がある。

96～99はSK40から見つかった古代土師器甕である。97～99は二次加熱によって外面に煤が付着し、所々で剥離が見られる。時期は、8世紀半ば～後半である。

SD1より出土の101は越前焼甕の口縁部である。口縁先端部は伸び上がり、下半は垂れ下がる。時期は14世紀前半～中頃と考える。

102から131はSD２から見つかった遺物である。102～107は土師器皿である。102は在地系のAタイプで、器壁が極めて厚い。14世紀末～15世紀前半と考えられる。103～107は京都の影響を受けた小型皿である。底部は103を除いて丸底で、器壁は全体に厚めである。時期は16世紀前半頃である。

108～114は瀬戸焼である。いずれも15世紀代までのものと思われる。

115はD類の白磁皿である。内外面に乳白色の釉薬がかかるが、内面底部と高台裏は露胎している。15世紀中頃と思われる。

116～122は青磁碗である。116は高台裏、117は内面見込部と高台裏及び畳付には釉薬が施されていない。118は内面見込に「福」の字が描かれている。高台裏は施釉後、外底の釉を輪状に削りとっている。119は高台裏と畳付の一部は施釉されていない。また、内面見込には何かでこすり付けられた痕があり、施釉が剥がれてしまっている。なお、118と119は意図的に底部と体部との間を打ち割っている。割れた高台付底部は二次的に別の事に利用されていたようである。一般的にこれらの物は遊戯具に使用したといわれている。D－Ⅰ類の120は口縁部が外反する無文タイプである。D－Ⅱa類の121は内面体部下半が施釉されておらず、全面施釉後に削りとったらしい。122は線描蓮弁文が薄く見えるが、あまり多く見られないタイプである。これらの時期は14～15世紀である。

123はE群Ⅷ類にあたる中国染付碗である。見込部がゆっくりと盛り上がる饅頭心タイプで16世紀中頃のものである。内面見込には人物が描かれ、高台裏には吉祥句「永保長春」が書かれている。

130は打製石斧である。基部と刃部の間が大きく括れるCタイプのものである。基部の先端は欠損している。円刃型の刃部の先端も使用頻度が高かったため摩滅が著しい。

133～168はSD3から見つかった遺物である。133～136は土師器皿である。133と134はEタイプ、135がAタイプ、136がFタイプある。時期は136が16世紀前半でその他は14世紀後半～15世紀前半である。

137は珠洲焼のR種C類の壺である。器面には、櫛歯状器具で轆轤の回転運動を利用して波状の文様帯を描出している。波状文は体部全体を6列にして描いている。また、体部上半には「六」の刻字が認められる。この壺は13世紀後半～14世紀前半頃で、蔵骨器に使用したものと考えられる。

139～141は珠洲焼すり鉢である。139は14世紀後半、140は14世紀前半に位置付けられる。

142と143は越前焼甕である。142は体部片で、等間隔の格子文様が見られる。13世紀中頃と考える。143は口縁部で、15世紀前半と思われる。

146～156は瀬戸焼である。古瀬戸後期が主体である。ここで見つかっている花瓶は供献具として使用したものと考えられる。

157はB群の白磁皿である。釉薬は淡く青みを帯びた白濁色で、内面には印文飾方法で草花を表現している。14世紀代のものである。

158～161は青磁碗である。158～160は口縁部が外反する無文のD－Ⅱ類で、14世紀後半と考えられる。161も口縁部が外反し、外面には鎬蓮弁文、内面には雷文帯が施されている。

164は打製石斧である。Cタイプと思われるが、基部と刃部との間の括れ具合は弱い。基部は欠損してなくなっている。刃部は凸刃型で、先端一部は摩滅している。

172～179はSD５出土の土師器皿である。178と179は15世紀中頃の在地産と考えられるが、その他はFタイプ京都系の大型皿で、16世紀前半を中心とする。

180はSD７から唯一出てきた土師器皿である。口縁部に一段のヨコナデを施し、体部は屈曲・外反する。14世紀後半頃と思われる。

182～198はSD10から見つかった遺物である。182～184は土師器皿で、182はAタイプで14世紀後半、183はFタイプで16世紀前半、184はEタイプで15世紀中頃と推定される。

187は13世紀末～14世紀前半の加賀焼甕である。口縁部はN字型をし、体部の肩の張りは弱くなるタイプである。肩部には「大」と刻まれた刻文が連続して見られる。

189は古瀬戸後Ⅱ期と思われる瀬戸焼折縁中皿である。

190は瓦質火鉢である。火鉢は中に木炭を入れて使用する暖房容器のことである。この火鉢は内外面とも黒色で、東北地方の影響を受けたものかもしれない。

197は炉壁である。炉壁とは鉄の製錬工程の際に作られた炉の一部のことである。炉は、鉄の素材を取り出す時破壊するため破片の状態で見つかる。197の炉壁は焼かれて硬くなった土の一部に、不純物の混じった鉄分がべっとりと付着している。また、SK15出土の76やSD２出土の132は鉄滓である。鉄滓とは製錬の時に不純物の混じった鉄の残滓のことで、錆付いた鉄の固まりのような形となっている。このように、鉄製品の製作過程で生じる遺物が少量ながら発見されているのは、当時この場所で刀や釘、農具などの道具を作る鍛冶を行っていたためで、必要な鉄製品をこの地周辺で製作したと考えられる。

198は宝篋印塔の塔身である。宝篋印塔とは中世より見られる石塔の一種で、供養塔婆として造立された。この塔の構造は、地上の上に基壇を設け、基礎を据えてその上に塔身を置き、さらに上部に笠を重ねて相輪を立てる。各部位は相輪を除いて方形である。

見つかった198の塔身の上部と下部には笠と基礎を接続するためのジョイントとなる突起物がある。塔身側面には、蓮台上部の月輪の中に梵字の一種である種字が刻まれている。種字は四面ともに刻まれており、いずれも異なった字である。種字の内容は、図中左から「金剛界四仏　阿閦（ウーン）」「胎蔵界四仏　天鼓雷音（アク）」「顕教四仏　弥陀（キリーク）」「金剛界四仏　宝生（タラーク）」である。また、これらの種字には方角が定められており、順番に「東」「北」「西」「南」を表している。種字は菩薩や明王など仏を表しており、平安時代より大陸から伝来した。石塔の塔身には四方仏として仏像が彫られたりするが、種字で表現する方が多い。四仏は金剛界・胎蔵界など様々な種類があり、その中に入る種字は決まっているが、室町時代以降、造立者の意向によって部分的に種字を置き換えることがあった。今回発見された塔身はこれに当てはまる。

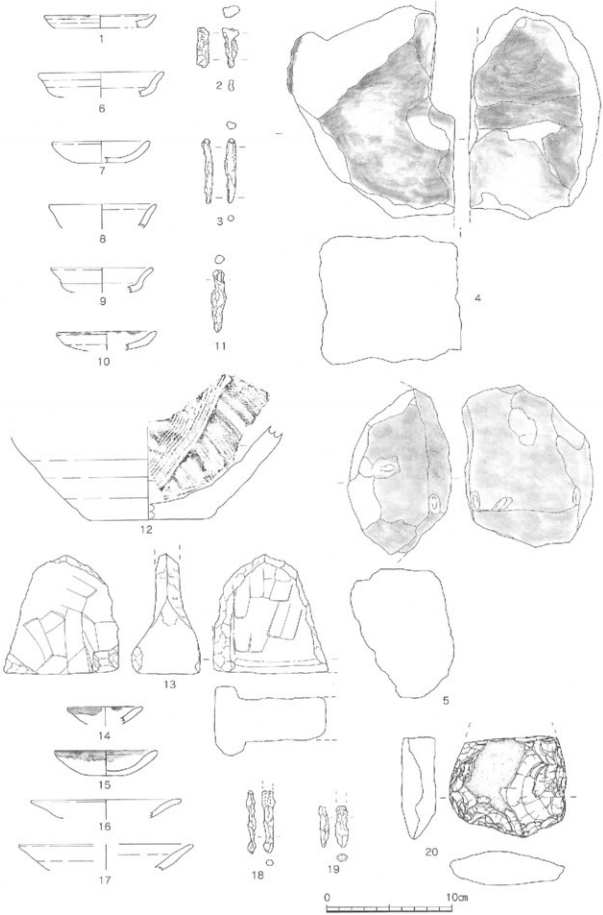
200と201はSD11から見つかった。200は15世紀後半に位置付けられる後Ⅳ期の瀬戸焼仏花瓶である。201は15世紀代のB－Ⅲb類の青磁碗である。外面には鎬蓮弁文、見込には花文が施される。また、全面施釉後に高台裏の釉薬を削りとっている。

211～213はSK４から出土した銅銭である。211は中国が「金」国であった時代の正隆２年（1158）に鋳造された正隆元寶である。212も中国銭と思われるが、文字が摩滅しているためよくわからない。213に至っては、３枚の銅銭が重なった状態となっており、両面とも文字の部分が隠れていることから詳細は不明である。

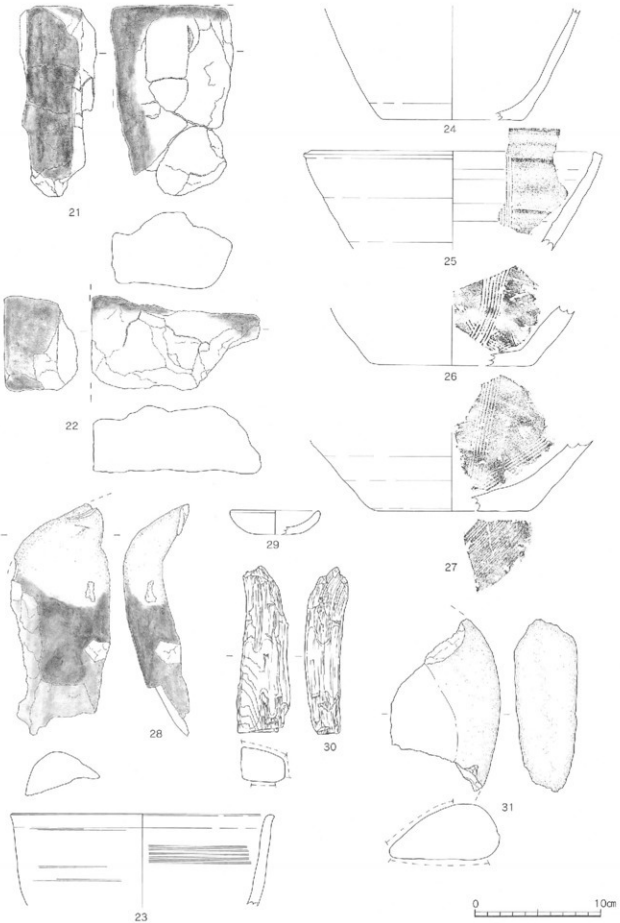
註

土器や陶磁器の分類・年代決定については以下の文献を参考にした。

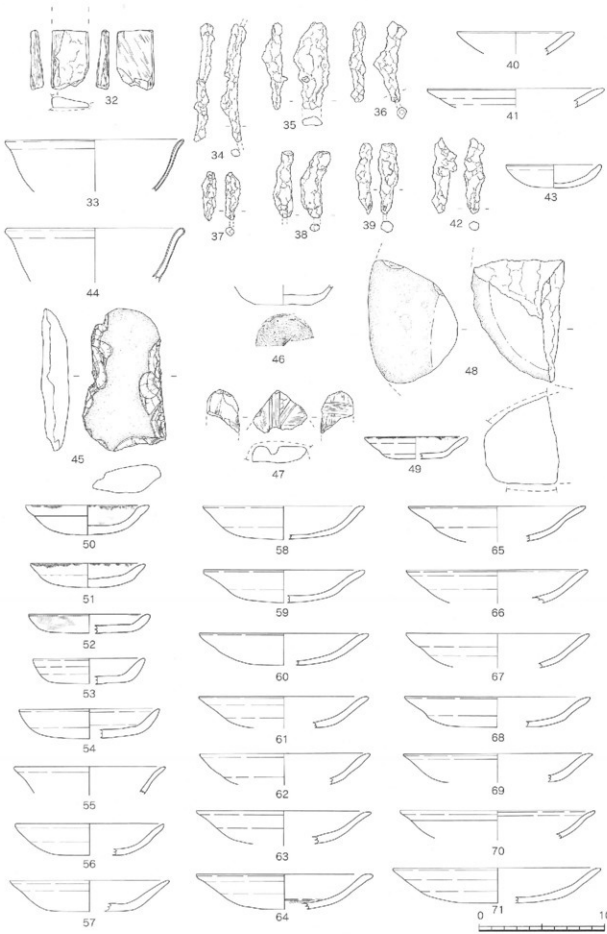
上田　秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類」　『貿易陶磁研究２』　日本貿易陶磁研究会
小野　正敏　1982　「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」　『貿易陶磁研究２』
日本貿易陶磁研究会
柿田　祐司　2006　「加賀・能登の様相」『中世北陸のカワラケと輸入陶磁器・瀬戸美濃製品』
北陸中世考古学研究会
田嶋　明人　1988　「古代土器編年軸の設定」　『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』
石川考古学研究会　北陸古代土器研究会
田中　照久・木村宏一郎　2005
「越前」　『全国シンポジウム中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』
文部科学省特定領域研究
藤澤　良祐　2005　「瀬戸系（施釉陶器生産技術の伝播）」　『全国シンポジウム中世窯業の諸相
～生産技術の展開と編年～』　文部科学省特定領域研究
藤田　邦夫　1997　「中世加賀国の土師器様相」　『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』
桂書房
宮下　幸夫　1997　「在地窯「加賀窯」」　『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』　桂書房
森田　勉　1982　「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」　『貿易陶磁研究２』
日本貿易陶磁研究会
吉岡　康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館



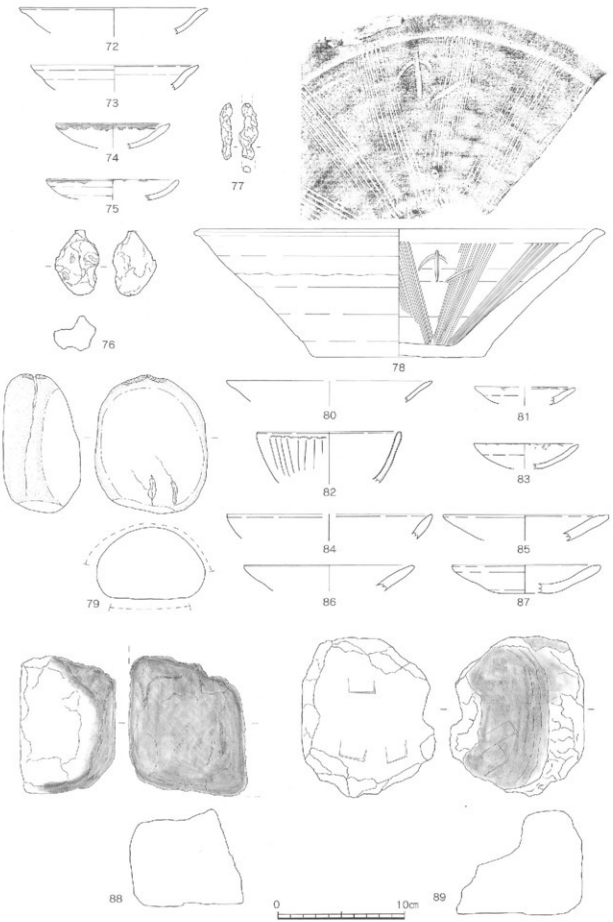
第28図　SI 1（1～3）・SI 2（4、5）・SI 4（6～8）・SI 5（9～13）・SI 6（14～20）出土遺物（S＝1／3）



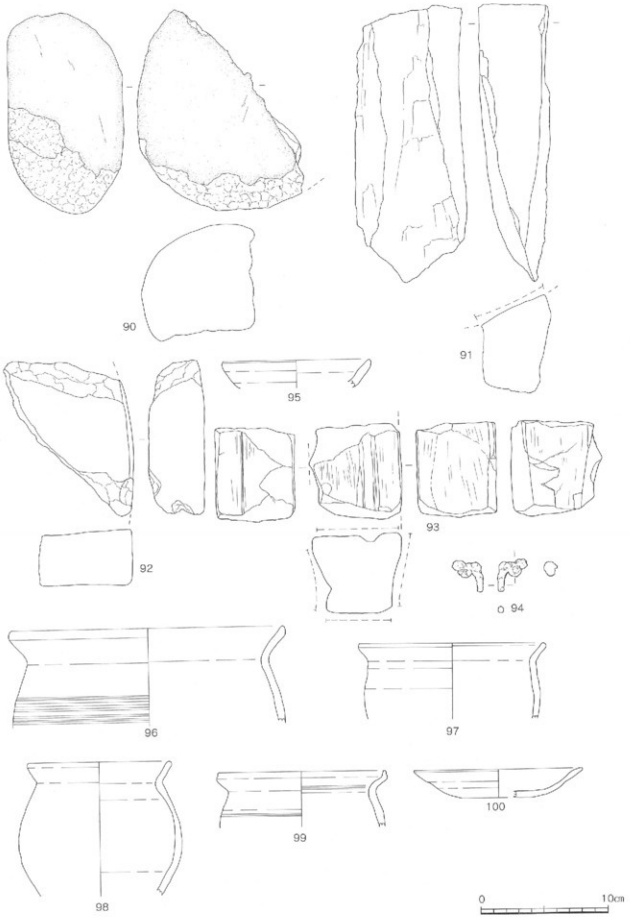
第29図　SI 9（21、22）・SI10（23、24）・SE 3（25～28）・SK 1（29）・SK 2（30、31）出土遺物（S＝1／3）



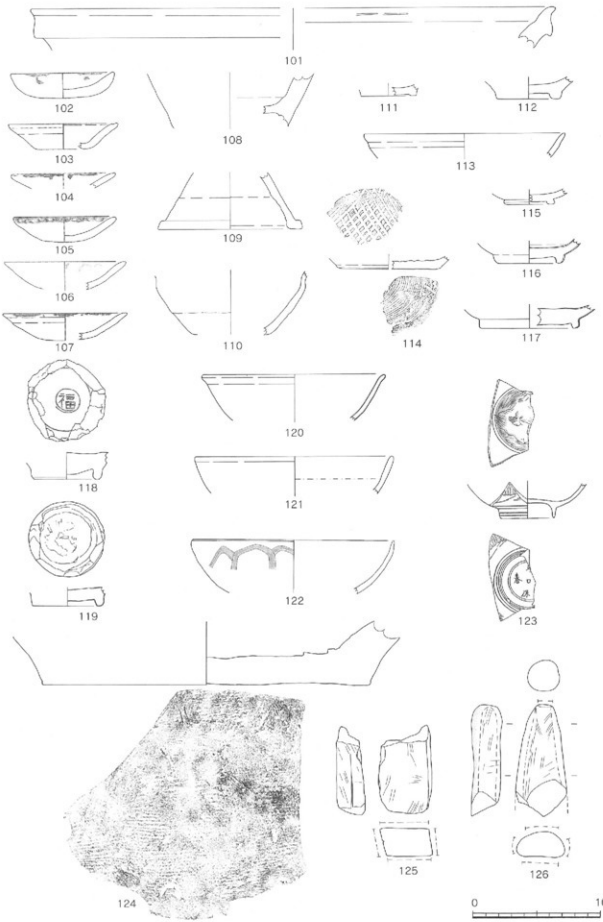
第30図　SK 3（32、33）・SK 4（34～39）・SK 5（40、41）・SK 7（42～45）・SK 8（46～71）出土遺物（S＝1／3）



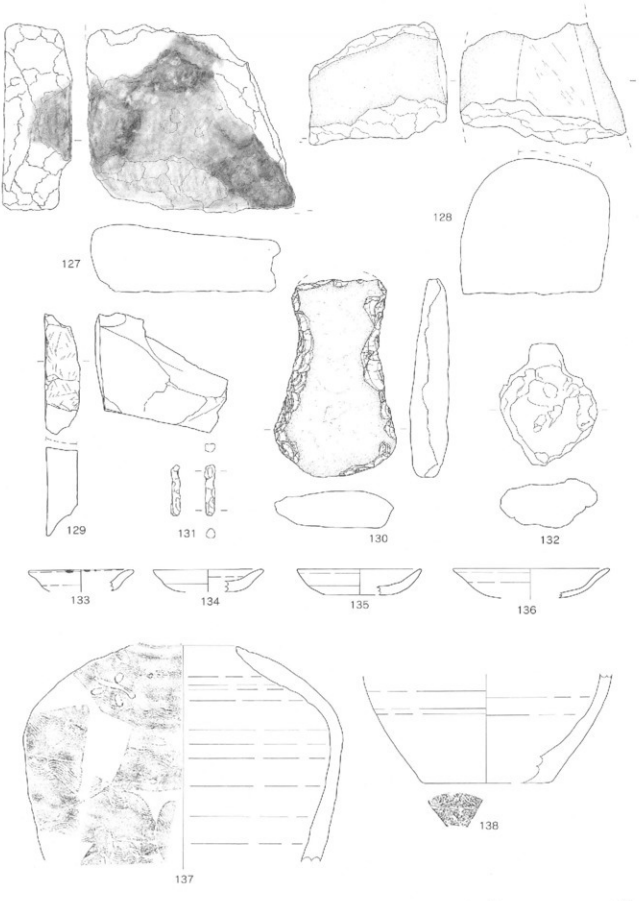
第31図　SK 9 (72)・SK10 (73)・SK13 (74、75)・SK15 (76)・SK21 (77、78)・SK23 (79)・SK27 (80)・SK28 (81)・SK32 (82)・SK34 (83)・SK35 (84)・SK36 (85～89) 出土遺物 (S＝1／3)



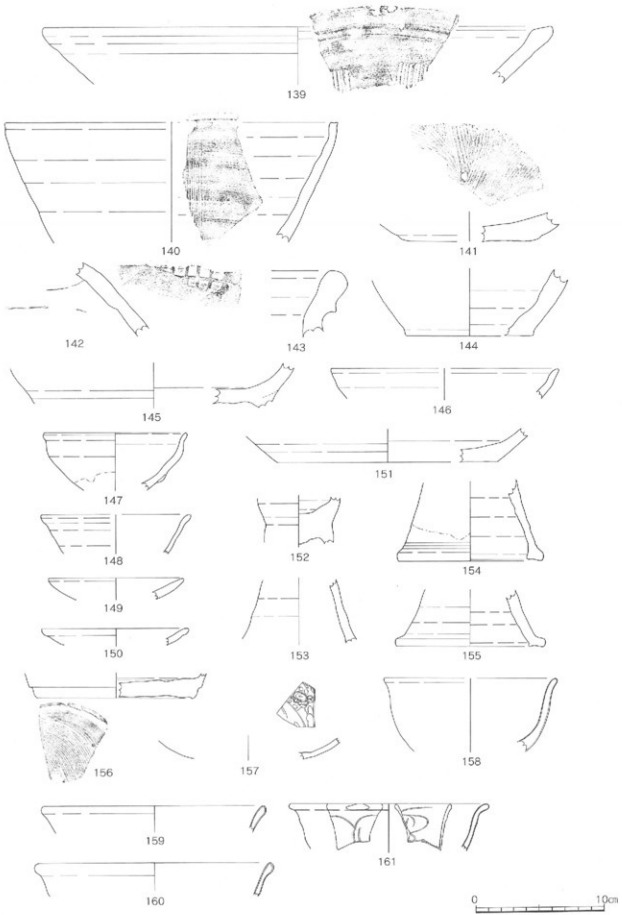
第32図　SK36（90～92）・SK38（93、94）・SK39（95）・SK40（96～99）・SD１（100）出土遺物（S＝１／３）



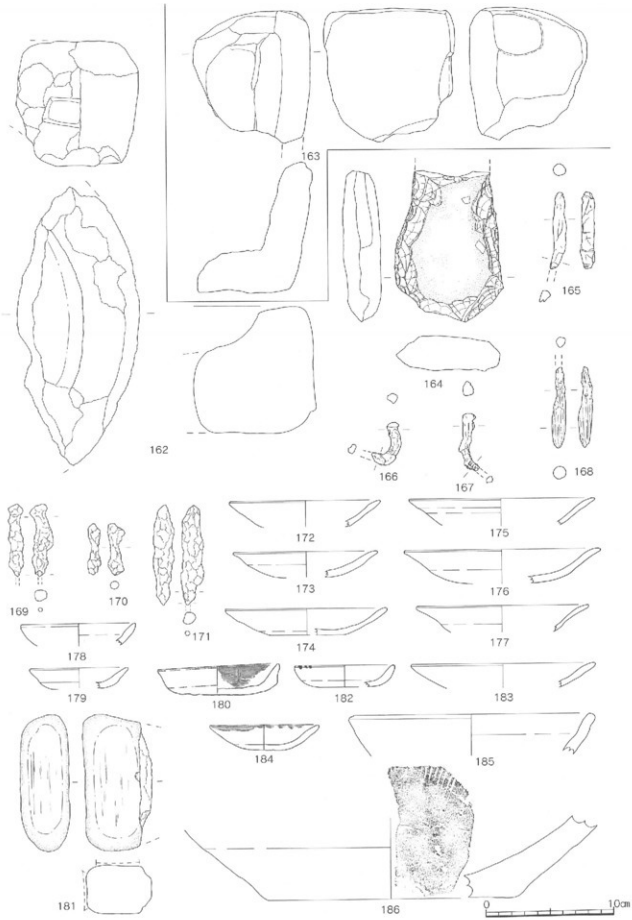
第33図　SD１(101)・SD２(102～126) 出土遺物 (S＝１／３)



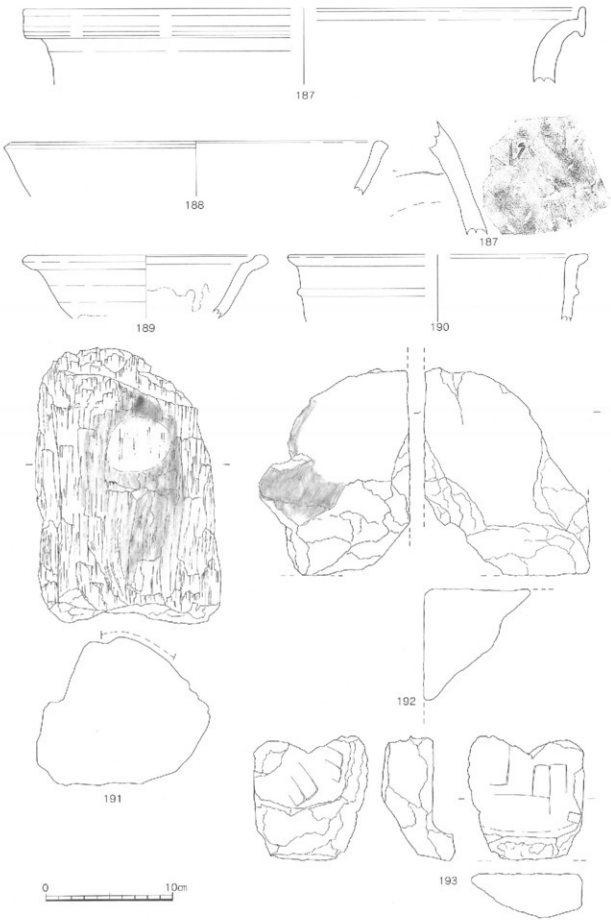
第34図　SD 2（127～132）・SD 3（133～138）出土遺物（S＝1／3）



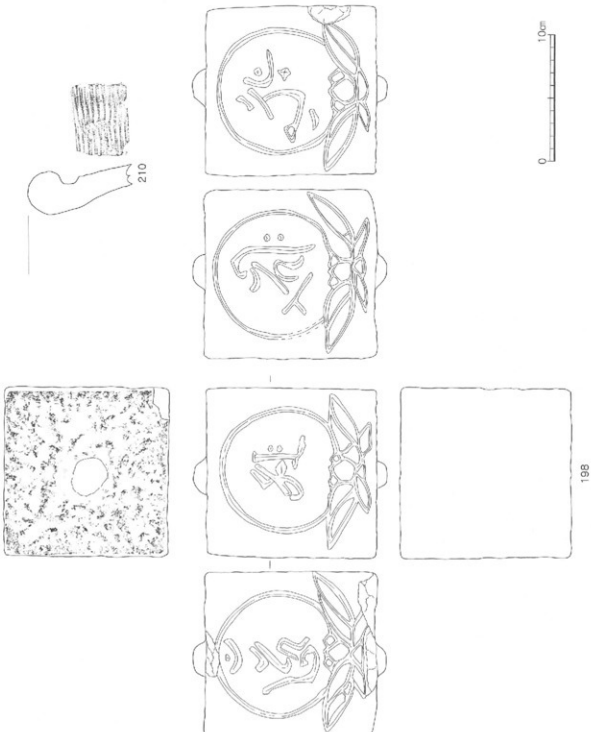
第35図　SD３（139～161）出土遺物（S＝１／３）



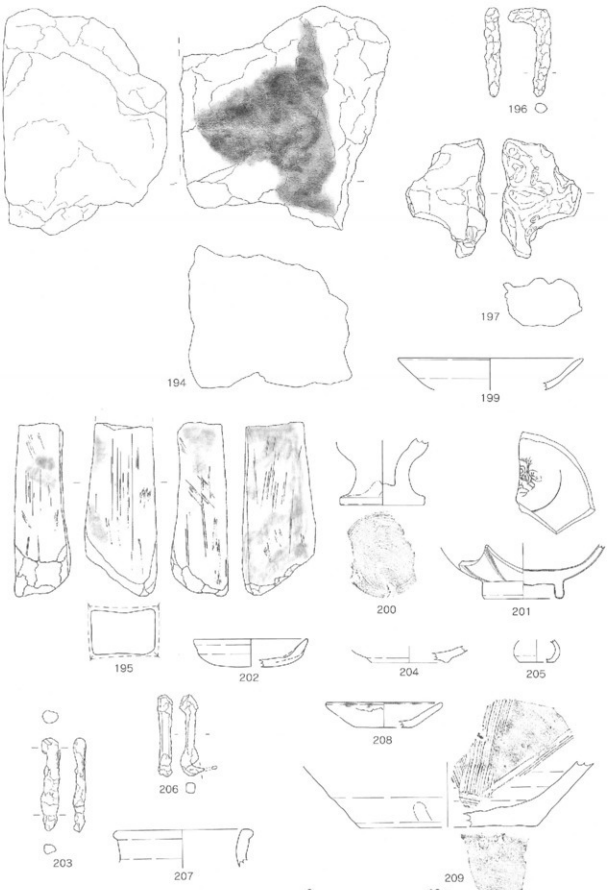
第36図　SD３（162～168）・SD４（169、170）・SD５（171～177）・SD７（178～180）
SD８（181）・SD10（182～186）出土遺物（S＝１／３）



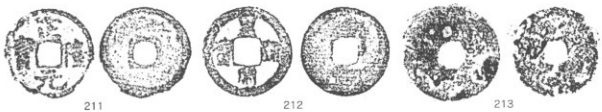
第37図　SD10（187～193）出土遺物（S＝1／3）



第38図　SD10（198）・調査区内（210）出土遺物（S＝1／3）



第39図　SD10（194～197）・SD11（199～201）・SD17（202）・SD20（203）・SD22（204、205）・調査区内（206～209）出土遺物（S＝1／3）



第40図　SK４（211～213）出土遺物（S＝１／１）

第２表　銭貨観察表

掲載番号	実測番号	出土地（旧番）	遺構番号	グリッドNo.	種別	初鋳年（西暦年）	直径（mm）	重量（g）		備考
211	T-52a	SK568	SK4	C-6	正隆元寶	1158	25	2.5		
212	T-52b	SK568	SK4	C-6	不明		25	2.1		
213	T-52c	SK568	SK4	C-6	不明		25	6		３枚重なった状態

胎土の組織は、粒の大きさをS（1㎜以下）、M（1～3㎜）、L（3㎜以上）とし、量を0（ほとんど含まない）、1（少ない）、2（やや多い）、3（多い）で表した。

第3表　遺物観察表（銭貨は除く。）

掲載番号	実測番号	出土地（旧番）	遺構番号	グリッドNo.	種類	器種	口径(㎜)	器高(㎜)	底径(㎜)	残存率	色調（外面）石材	色調（内面）重量（g）	胎土混和物	備考
1	N-2	SX632	SI1	A-6	土師器	皿	88	10	72	全体1/9	にぶい橙	にぶい橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	海綿骨針
2	N-4	SX632	SI1	A-6	鉄製品	釘	32	14	11			33		
3	N-3	SX632	SI1	A-6	鉄製品	釘	51	10	9			4.1		
4	N-6	SX634	SI2	A-6	石製品	砥縁石	170	135	105		凝灰岩	1,355		煤付着　剥離顕著
5	N-5	SX634	SI2	A-6	石製品	砥縁石	130	83.5	102		凝灰岩	585		煤付着　剥離顕著
6	N-44	SX587	SI4	B、C-5	土師器	皿	100			口縁1/9	にぶい黄橙	黒褐	砂礫S-2	
7	T-51	SX588	SI4	C-5	土師器	皿	76	17	40	全体5/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	
8	N-43	SX587	SI4	B、C-5	土師器	皿	85			口縁1/9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、M-1	
9	T-63	SX542	SI5	C-6	土師器	皿	82	19.5		全体11/36	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	
10	T-64	SX542	SI5	C-6	土師器	皿	80	15		全体5/18	にぶい黄橙	にぶい橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	煤付着
11	T-65	SX542	SI5	C-6	鉄製品	釘	50	12	9			1		
12	T-62	SX542	SI5	C-6	珠洲焼	すり鉢			90	底部1/3	灰黄	灰黄	砂礫M-1　S-1、黒色粒L-1　M-1　S-1	
13	T-61	SX542	SI5	C-6	石製品	台石	92	95	55		凝灰岩	150		
14	T-143	SX430	SI6	D-6	土師器	皿	60	14		口縁4/9	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	
15	T-A	SX430	SI6	D-6	土師器	皿	82	20	15	全体1/4	橙色	橙色	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	煤付着
16	T-145	SX430	SI6	D-6	土師器	皿	120	14		全体5/36	灰白	灰白	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	
17	T-144	SX430	SI6	D-6	土師器	皿	13			小片	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1	
18	T-142A	SX430	SI6	D-6	鉄製品	釘	49	11	0.7					
19	T-142B	SX430	SI6	D-6	鉄製品	釘	33	11	0.8					
20	T-147	SX430	SI6	D-6	石製品	打製石斧	80	93	27.5	基部欠損	緑色凝灰岩			
21	T-56	SX94	SI9	C-3	石製品	砥縁石	152	99	61		砂岩	500		煤付着　剥離顕著
22	T-57	SX94	SI9	C-3	石製品	砥縁石	133	76	58		砂岩	350		煤付着　剥離顕著
23	T-154	SX700	SI10	D-3	土師器	鉢	21			口縁1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、黒色粒M-1　S-1	古代
24	T-155	SX700	SI10	D-3	土師器	底部			110	底部1/12	浅黄橙	浅黄橙	砂礫M-1　M-1　S-1、赤色酸化粒S-1	古代
25	T-190	SX732	SE3	D・E-2	珠洲焼	すり鉢	237			口縁1/18	灰	灰	砂礫S-1、黒色粒S-1　石英S-1	
26	T-188	SX732	SE3	D・E-2	珠洲焼	すり鉢			136	底部2/9	にぶい黄	にぶい黄	砂礫M-1　S-1、黒色粒S-1	
27	T-187	SX732	SE3	D・E-2	珠洲焼	すり鉢			130	底部1/6	灰	灰	砂礫S-1、黒色粒S-1	海綿骨針少量
28	T-189	SX732	SE3	D・E-2	石製品	砥石	185	81	52		砂岩	420		煤付着 焼成による剥離顕著
29	T-10	SK624	SK1	B-7	土師器	皿	72	19	26	全体1/4	浅黄橙	浅黄橙		
30	T-54	SX585	SK2	C-6	石製品	砥石	133	43	34		珪化木	220		
31	T-55	SX585	SK2	C-6	石製品	砥石	136	87	50		安山岩か	580		二次焼成
32	T-80	SK562	SK3	C-7	石製品	砥石	47.5	31	10		鳴滝か	15		仕上砥石
33	T-79	SK562	SK3	C-7	青磁	椀	142			口縁1/6	明オリーブ灰	明オリーブ	砂礫S-1	
34	T-86	SK568	SK4	C-6	鉄製品	棒状製品	94	20	16			95		
35	T-87	SK568	SK4	C-6	鉄製品	板状製品	69	29	21			17.6		
36	T-89	SK568	SK4	C-6	鉄製品	釘	61	18	14			9.5		
37	T-90	SK568	SK4	C-6	鉄製品	釘	39	15	13			4.2		
38	T-88	SK568	SK4	C-6	鉄製品	釘	58	24	17			12.7		
39	T-81	SK568	SK4	C-6	鉄製品	釘	56.5	20	12			8.6		
40	T-38	SK557	SK5	C-5	土師器	皿	94	18		口縁1/4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、黒色粒S-1	
41	T-39	SK557	SK5	C-5	土師器	皿	140	15		口縁1/9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	

掲載番号	実測番号	出土地（旧番）	遺構番号	グリッドNo.	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調（外面）石材	色調（内面）重量（g）	胎土混和物	備考
42	T-132	SK480	SK7	D-7	鉄製品	釘	60	12	20			12.1		
43	T-130	SK480	SK7	D-7	土師器	皿	76	18		口縁1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	
44	T-131	SK480	SK7	D-7	青磁	碗	143			口縁1/12	オリーブ灰	オリーブ灰	砂礫S-1、黒色粒S-1	
45	T-126	SK480	SK7	D-7	石製品	打製石斧	113	67	22	ほぼ完形	凝灰岩	170		
46	T-134	SK467	SK8	D-6	瓦質土器	鍋			46	底部1/2	灰黄	灰黄	砂礫S-1　M-1、黒色粒S-1	鉄釉
47	T-146	SK467	SK8	D-6	石製品	砥石	31	43	25		凝灰岩	18		
48	T-133	SK467	SK8	D-6	石製品	磨石	97	74	72		流紋岩	490		
49	N-164	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	82	17	50	全体1/4	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1	煤付着
50	N-183	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	98	23		全体7/18	にぶい橙	にぶい橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	煤付着
51	N-182	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	92	20	50	全体5/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-2、赤色酸化粒	煤付着
52	N-171	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	97	15	70	全体1/3	にぶい橙	浅黄橙 灰黄褐	砂礫S-1、赤色酸化粒	煤付着
53	N-170	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	90	20	70	全体1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1	
54	N-166	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	110	23		全体1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	
55	N-175	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	120			口縁1/9	灰白	浅黄橙 灰白	砂礫S-1、赤色酸化粒	
56	N-181	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	118	25	50	全体1/12	浅黄橙	灰	砂礫S-1	
57	N-177	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	127	24	70	全体1/12	灰白	浅黄橙 灰白	砂礫S-1、赤色酸化粒	
58	N-163	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	129	26		全体4/9	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-2、赤色酸化粒	
59	N-168	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	130	26		全体1/12	灰白	褐灰	砂礫S-2、赤色酸化粒	
60	N-172	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	135	25		全体1/7	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1	
61	N-173	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	136	30		全体1/5	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-2、赤色酸化粒	
62	N-176	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	136			口縁1/9	明褐灰	黒褐	砂礫S-1、赤色酸化粒	
63	N-161	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	140			全体1/5	灰白	灰白	砂礫S-2、赤色酸化粒	
64	N-165	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	140	27		全体1/5	灰白	灰白	砂礫S-2、赤色酸化粒	
65	N-174	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	141	27		全体1/6	浅黄橙　褐灰	淡橙　褐灰	砂礫S-1	
66	N-179	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	141			全体1/7	灰白	浅黄橙	砂礫S-2	
67	N-178	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	146			全体1/12	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	
68	N-167	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	148	23		全体1/12	灰白	黄灰	砂礫S-1、赤色酸化粒	
69	N-169	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	150			全体1/9	浅黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒	
70	N-180	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	156			口縁1/4	にぶい橙	浅黄橙	砂礫S-2　石英	
71	N-162	SK467	SK8	D-6	土師器	皿	164	27.5		全体1/3	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-2、赤色酸化粒	
72	N-203	SK389	SK9	E-6	土師器	皿	148			全体1/4	灰白	灰白	砂礫S-2	
73	N-205	SK390	SK10	E-6	土師器	皿	132			全体1/6	にぶい橙	にぶい橙	砂礫S-1　石英	
74	T-136	SK393	SK13	D-5	土師器	皿	89	20		全体7/36	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1、石英微量	煤付着
75	T-135	SK393	SK13	D-5	土師器	皿	104	16		全体1/9			砂礫S-1、海綿骨針少量	煤付着
76	N-211	SK386	SK15	F-5	鉄製品	鉄滓	52	35	34			35.2		
77	T-160	SK280	SK21	D-4	鉄製品	釘	45	16	10			4.5		
78	T-159	SK280	SK21	D-4	加賀焼	すり鉢	324	102	130	全体1/3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S・M・L-1、黒色粒S・M・L-1	おろし目8本
79	T-127	SX255	SK23	D-4	石製品	磨石	110	89	62		凝灰岩	790		
80	N-207	SK328	SK27	E-4	土師器	皿	162			口縁1/12	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-微量	
81	N-213	SK329	SK28	E-4	土師器	皿	79			口縁1/12	にぶい橙	橙	砂礫S-1	煤付着
82	N-210	SK343	SK32	E-4	青磁	碗	114			全体1/7	灰オリーブ	灰オリーブ	黒色粒	
83	N-214	SK364	SK34	E-3	土師器	皿	81			全体1/9	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-2	煤付着
84	N-208	SK683	SK35	E-2	土師器	皿	161			口縁1/12	にぶい橙	にぶい橙	砂礫S-1　赤色酸化粒	

掲載番号	実測番号	出土地(出番)	遺構番号	グリットNo.	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調(内側)石材	色調(外側)重量(g)	胎土混和物	備考
85	T-185	SX731	SK37	D・E-2	土師器	皿	130	20		全体2/9	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1、石英S-1	
86	T-192	SX731	SK37	D・E-2	土師器	皿	136			口縁1/6	赤橙	橙　黒褐	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、石英S-1	
87	T-184	SX731	SK37	D・E-2	土師器	皿	116	22.5	40	全体5/18	橙	橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1、石英S-1	
88	T-198	SX731	SK37	D・E-2	石製品	砂縁石	110	93	75		凝灰岩	540		
89	T-193	SX731	SK37	D・E-2	石製品	行火	105	127	87		凝灰岩	590		
90	T-194	SX731	SK37	D・E-2	石製品	砥石	159	130.5	92		安山岩	2,180		
91	T-197	SX731	SK37	D・E-2	石製品	砥石	221	56	88.5		凝灰岩	1,290		
92	T-196	SX731	SK37	D・E-2	石製品	不明	124	102	44		凝灰岩	500		
93	T-158	SK750	SK36	D-2	土師器	皿	118	22		L縁1/12	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1　赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1、雲母含有少量	
94	N-201	SK763	SK39	E-1	石製品	砥石	75	72	63		砂岩	490		
95	N-212	SK763	SK39	E-1	鉄製品	釘	26	24	14			4.2		
96	T-71	SX850	SK40	C-1	土師器	甕	220			全体5/36	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	古代
97	T-72	SX850	SK40	C-1	土師器	甕	148			口縁1/12	にぶい黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、L-1	古代
98	T-69	SX850	SK40	C-1	土師器	甕	114			全体1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1	古代
99	T-70	SX850	SK40	C-1	土師器	甕	135			口縁1/6	橙色	橙色	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、石英S-1	古代
100	T-11	SD500	SD1	B-7	土師器	皿	134	21	56	全体1/6	灰白	灰白	砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	
101	N-25	SD696	SD1	A・B-7	越前焼	壺	-412			口縁1/12	暗赤褐	灰オリーブ	暗赤褐　オリーブ黄	砂礫S-2　S-1
102	N-48	SD120	SD2	B・C-7	土師器	皿	82	20	40	全体1/6	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、赤色酸化粒、石英	煤付着
103	N-121	SD231	SD2	D－2・3	土師器	皿	86	20	44	全体1/7	浅黄橙	にぶい黄橙	砂礫、赤色酸化粒、石英	
104	T-128	SD231	SD2	D-1	土師器	皿	82	12		口縁5/36	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1、黒色粒S-1	煤付着
105	N-40	SD120	SD2	B・C-6	土師器	皿	81	20	40	ほぼ完形	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1	煤付着
106	N-46	SD120	SD2	B・C-7	土師器	皿		96		全体1/9	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-2	煤付着
107	N-120	SD231	SD2	D－2・3	土師器	皿	98	21		全体1/6	浅黄橙	浅黄橙	砂礫S-1	煤付着
108	N-49	SD120	SD2	B・C-7	瀬戸焼	数子か				小片	褐色　黒	にぶい黄橙	砂礫S-1	鉄釉
109	T-138	SD231	SD2	D-3・4	瀬戸焼	花瓶			104	底部1/9	灰	灰	砂礫S-1、黒色粒S-1、L-1	鉄釉
110	T-139	SD231	SD2	D-3・4	瀬戸焼	天目茶碗			60	全体1/4	灰白　黒褐	黒褐	砂礫S-1、L-1	鉄釉
111	T-15	SD120	SD2	B-5	瀬戸焼	天目茶碗			44	底部1/3	灰赤	灰黄褐	砂礫S-1	鉄釉
112	N-119	SD231	SD2	D-2・3	瀬戸焼	碗			50	底部1/4	灰白	灰黄	黒色粒　茶色粒	灰釉
113	N-91	SD231	SD2	D-4・5	瀬戸焼	碗	158			全体1/18	灰オリーブ	灰オリーブ	黒色粒	灰釉
114	N-47	SD120	SD2	B・C-7	瀬戸焼	卸皿			82	底部1/4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1	灰釉
115	T-14	SD120	SD2	B-5	白磁	皿			42	底部1/2	灰白	灰白	砂礫S-1、黒色粒S-1	
116	N-118	SD231	SD2	D-2・3	青磁	碗			54	底部1/4	にぶい褐	灰オリーブ	黒色粒	
117	N-27	SD120	SD2	B・C-6	青磁	碗			78	底部1/7	にぶい橙	灰オリーブ	砂礫S-1、黒色粒	
118	T-12	SD120	SD2	B-5	青磁	碗			56	底部完形	灰オリーブ	灰オリーブ	砂礫微量	
119	N-39	SD120	SD2	B・C-6	青磁	碗			56	底部完形	浅黄	浅黄	砂礫S-1、赤色粒、黒色粒	
120	N-38	SD120	SD2	B・C-6	青磁	碗	145			口縁1/12	灰オリーブ	灰オリーブ	黒色粒　茶色粒	
121	N-35	SD120	SD2	B・C-6	青磁	碗	158			口縁1/9	明緑灰	明緑灰	黒色粒（多）	
122	T-13	SD120	SD2	B-5	青磁	碗	160			口縁1/9	明緑灰	明緑灰	砂礫	
123	N-93	SD231	SD2	D－4・5	染付	碗			43	全体5/12			黒色粒	中国製
124	N-117	SD231	SD2	D－4・5	鳥帯硯	硯			260	底部1/4	灰褐	黒褐	砂礫S-1、M-1、L-1	
125	N-41	SD231	SD2	B・C-6	石製品	砥石	70	42.5	23		砂岩	83.3		
126	N-94	SD231	SD2	D－4・5	石製品	砥石	88	41	24		凝灰岩	100		
127	T-222	SD231	SD2	D-4	石製品	砂縁石	150	165	54		凝灰岩	920		

掲載番号	実測番号	出土地（旧番）	遺構番号	グリッドNo.	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調（外面）石材	色調（内面）重量（g）	胎土・焼成・他	備考
128	T-224	SD231	SD2	D-4	石製品	砥石	97	130	108		角礫凝灰岩	1,570		
129	X-42	SD120	SD2	B・C-6	石製品	砥石	96	23	104			310		
130	T-28	SD120	SD2	B・C-6	石製品	打製石斧	157	96	31		火山礫凝灰岩	560		
131	N-50	SD120	SD2	B・C-7	鉄製品	釘	40	9	8			32		
132	N-45	SD120	SD2	B・C-7	鉄製品	鉄滓	97	77	39			285		
133	N-113	SD100	SD3	D-3・4	土師器	皿	82			口縁1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-2	煤付着
134	N-104	SD100	SD3	D-3・4	土師器	皿	87	17		全体1/5	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-2、赤色酸化粒	
135	N-115	SD100	SD3	D-3・4	土師器	皿	96	20	56	全体1/9	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-2	
136	N-204	SD100	SD3	E-3・4	土師器	皿	122			全体1/4	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1	
137	T-124	SD100	SD3	C～E-3～5	珠洲焼	壺	85			全体1/3	明褐灰	灰	砂礫S-1、M-1	「六」刻字
138	T-125	SD100	SD3	D-4・5	珠洲焼	壺			104	底部1/6	黄灰	灰	砂礫S-1	
139	T-20	SD100	SD3	B-4・5	珠洲焼	すり鉢	402			口縁1/9	黄灰	黄灰	砂礫S-1、M-1	
140	N-200	SD100	SD3	E-3・4	珠洲焼	すり鉢	268			全体1/18	灰	灰	砂礫S-2	
141	N-206	SD100	SD3	E-3・4	珠洲焼	すり鉢			114	底部1/4	灰	灰	砂礫S-1、石英	
142	N-29	SD100	SD3	B・C-4	越前焼	甕				小片	黄灰	黄灰	砂礫S-2、M-2	格子文押印
143	T-17	SD100	SD3	B-5	越前焼	甕				小片	灰	暗赤褐	砂礫L-1、M-1、S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒L-1、S-1	
144	T-18	SD100	SD3	B-5	加賀焼	壺			1002	底部7/36	にぶい黄褐	灰黄	砂礫M-1、S-1、黒色粒S-1	
145	T-19	SD100	SD3	B-4・5	越前焼	すり鉢			184	底部1/9	にぶい赤褐	にぶい赤褐	砂礫M-1、S-1、黒色粒S-1	
146	N-106	SD100	SD3	C・D3・4	瀬戸焼	碗	179			口縁1/18	黄オリーブ	黄オリーブ	砂礫S-1	灰釉
147	N-100	SD100	SD3	D-3・4	瀬戸焼	天目茶碗	112			口縁1/4	黒褐	黒褐	砂礫S-1	鉄釉
148	N-103	SD100	SD3	C・D3・4	瀬戸焼	入子	118			口縁1/12	灰オリーブ	灰オリーブ	茶色粒微量	灰釉
149	N-31	SD100	SD3	B・C-4	瀬戸焼	緑釉小皿	106			口縁1/9	灰オリーブ	灰オリーブ	黒色粒	灰釉
150	X-116	SD100	SD3	D-3・4	瀬戸焼	皿	115			口縁1/6	褐	褐	砂礫S-1	鉄釉
151	N-30	SD100	SD3	B・C-4	瀬戸焼	真縁大皿			174	底部1/6	にぶい黄橙	にぶい黄橙	砂礫S-1	
152	N-99	SD100	SD3	C・D3・4	瀬戸焼	花瓶				小片	黒褐	黄灰	砂礫S-2	鉄釉
153	N-95	SD100	SD3	D-4・5	瀬戸焼	花瓶				小片	黒褐	灰白	砂礫S-1、黒色粒	鉄釉
154	N-109	SD100	SD3	C～E3・4	瀬戸焼	花瓶			115	底部7/12	灰オリーブ	灰白	黒色粒微量	灰釉
155	N-34	SD100	SD3	B・C-4	瀬戸焼	花瓶			118	底部1/4	暗褐	にぶい黄褐	砂礫S-1、黒色粒　石英	鉄釉
156	N-1	SD100	SD3	A-5・6	瀬戸焼	皿			124	底部1/6	黄オリーブ	にぶい黄褐	黒色粒　茶色粒	灰釉
157	N-114	SD100	SD3	D-3・4	白磁	皿				小片	明白青	明白青	黒色粒	
158	N-32	SD100	SD3	B・C-4	青磁	碗	137			全体1/6	灰オリーブ	灰オリーブ	黒色粒　茶色粒	
159	T-22	SD100	SD3	B-4・5	青磁	碗	178			口縁1/12	灰オリーブ	灰オリーブ	砂礫S-1	
160	T-21	SD100	SD3	B-4・5	青磁	碗	190			口縁1/18	灰オリーブ	灰オリーブ	砂礫S-1、黒色粒S-1	
161	N-33	SD100	SD3	B・C-4	青磁	碗	158			全体1/12	灰オリーブ	灰オリーブ	黒色粒　茶色粒	
162	T-160	SD100	SD3	B-5	石製品	石臼	220	97	100		火山礫凝灰岩	2180		
163	N-105	SD100	SD3	C・D3・4	石製品	行火	105	92	105		凝灰岩	370		
164	N-98	SD100	SD3	D-4・5	石製品	打製石斧	119	86	30		火山礫凝灰岩	420		
165	N-218	SD100	SD3	E-3・4	鉄製品	釘	61	11	12			73		
166	N-215	SD100	SD3	E-3・4	鉄製品	釘	34.5	10	9			33		
167	N-217	SD100	SD3	E-3・4	鉄製品	釘	46	10	12			5		
168	N-216	SD100	SD3	E-3・4	鉄製品	釘	64	11	11			5		
169	T-83	SD504	SD4	C-6・7	鉄製品	釘	37.5	18.5	12			87		

掲載番号	実測番号	出土地(旧番)	遺構番号	グリットNo.	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	色調(外面)石材	色調(内面)	重量(g)	胎土混和物	備考
170	T-84	SD501	SD4	C-6・7	鉄製品	釘	41	14	10				4.2		
171	T-82	SD494	SD5	C-6	鉄製品	釘	79	19	17				19.1		
172	T-76	SD494	SD5	C-6	土師器	皿	120	20		口縁1/9	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	
173	T-75	SD494	SD5	C-6	土師器	皿	114	20	40	口縁1/6	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	
174	T-74	SD494	SD5	C-6	土師器	皿	128	21	58	全体1/4	灰黄	黄灰		砂礫S-1、M-1	
175	T-78	SD494	SD5	C-6	土師器	皿	146	21		口縁1/9	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	
176	T-68	SD494	SD5	C-6	土師器	皿	154	27		全体23/36	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、黒色粒S-1	
177	T-77	SD494	SD5	C-6	土師器	皿	136	21		口縁1/9	淡黄	淡黄		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1	
178	T-73	SD425	SD7	C-5	土師器	皿	90			口縁1/9	にぶい黄橙	にぶい黄橙		砂礫S-1、石英S-1	
179	T-67	SD425	SD7	C-6	土師器	皿	78	16		口縁1/3	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1	
180	T-66	SD425	SD7	C-5	土師器	皿	95	25	40	完形	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	煤付着
181	T-53	SD420	SD8	C-5	石製品	砥石	190	45	39		砂岩	灰	380		
182	T-137	SD410	SD10	D-7	土師器	皿	81	17	40	口縁2/9	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	煤付着
183	T-219	SD410	SD10	D-6	土師器	皿	146			口縁1/9	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	
184	T-153	SD410	SD10	D-6	土師器	皿	86	21	25	完形	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、石英微量	煤付着
185	T-151	SD410	SD10	D-6	加賀焼	片口鉢	193			口縁1/9	灰	灰		砂礫S-1、M-1	
186	T-148	SD410	SD10	D-6	珠洲焼	すり鉢			202	底部5/36	灰	灰		砂礫S-1、M-1、赤色酸化粒S-1、黒色粒S-1	
187	N-123	SD410	SD10	D-7	加賀焼	壺	442			口縁1/13	浅黄橙	にぶい橙		砂礫S-2、M-1、L-1	「大」押印
188	T-152	SD410	SD10	D-6	越前焼	すり鉢	302			口縁1/8	灰黄褐	褐灰		砂礫M-1、S-1、黒色粒S-1	
189	T-150	SD410	SD10	D-6	瀬戸焼	折縁中皿	194	50		口縁1/7	灰オリーブ	灰オリーブ		砂礫S-1、黒色粒S-1	灰釉
190	T-140	SD410	SD10	D-7	瓦質土器	火鉢	231			口縁1/3	黒	黒		砂礫S-2	
191	T-221	SD410	SD10	D-6	石製品	砥石	220	147	120			珪化木	4,650		
192	T-141	SD410	SD10	D-7	石製品	炉縁石	165	130	119			凝灰岩	1,580		
193	T-149	SD410	SD10	D-6	石製品	行火	99	87	59			凝灰岩	200		
194	T-60	SD410	SD10	C-5	石製品	炉縁石	179	165	129			凝灰岩	1,950		
195	T-220	SD410	SD10	D-6	石製品	砥石	138	58	45			砂岩	360		
196	T-157	SD410	SD10	D-6	鉄製品	釘	68.5	34	13				16.4		
197	N-122	SD410	SD10	D-6	鉄製品	炉壁	94	64	43				128.9		
198	T-223	SD410	SD10	D-5	石製品	宝塔	153	136	135			片麻岩	6,100		
199	N-111	SD451	SD11	D-7	土師器	皿	146			全体1/5	浅黄橙	浅黄橙		砂礫S-1	
200	N-112	SD451	SD11	D-7	瀬戸焼	花瓶			68	底部4/9	黄褐	灰白		砂礫S-1、黒色粒	鉄釉
201	N-110	SD451	SD11	D-7	青磁	皿			62	底部1/2	灰オリーブ	灰オリーブ		黒色粒	
202	N-109	SD701	SD17	E-3	土師器	皿	80			全体1/3	浅黄橙	にぶい橙		砂礫S-1、赤色酸化粒	
203	N-202	SD765	SD20	E-1	鉄製品	釘	74	15	10				10.5		
204	T-7	SD720	SD22	B-6	瀬戸焼	皿			60	底部1/6	浅黄	浅黄		砂礫S-1	灰釉
205	T-8	SD70	SD22	B-6	瀬戸焼	水滴			28	全体1/3	褐	灰黄		砂礫S-1、黒色粒S-1	鉄釉
206	T-85	遺構面	遺構面	C-3	鉄製品	釘	64	20	12				8.3		
207	N-107	遺構面	遺構面	C・D-1~3	越前焼	壺	112			口縁1/7	褐	橙		砂礫S-1、赤色酸化粒	
208	T-129	遺構面	遺構面	D-6	土師器	皿	94	20	44	口縁1/4	にぶい黄橙	にぶい黄橙		砂礫S-1、赤色酸化粒S-1、石英微量	
209	N-108	遺構面	遺構面	C・D-1~3	珠洲焼	すり鉢			140	底部1/9	灰	灰色		砂礫S-1、M-1	
210	N-26	遺構面	遺構面	A・B-7	珠洲焼	甕				小片	褐灰	褐灰		砂礫S-2、M-2、石英	

第４章　総括

縄文時代

当該時期に該当する遺構は存在しない。しかし、調査区内からは縄文土器片や打製石斧が出土している。本調査区から約100m北西方で実施されたノダ地区の発掘調査（野々市町教委　2003）では、縄文後期中葉後半の滝見式期の遺構・遺物が発見された。その調査区内にある１基の土坑からは遺存状況のよい土偶が見つかっており、集落跡が存在していたことを示唆している。今回見つかった縄文時代の遺物は近隣に存在するかもしれない集落跡との関連性がもたれる。

奈良時代

調査区南端で竪穴建物の可能性がある土坑SK40を確認した。カクランが著しいため詳細な状況を知ることはできないが、８世紀半ば～後半までの小型・中型甕を４点発見した。SK40の東方20mにある掘立柱建物SB5は遺物こそ確認されていないが、柱穴の構造から古代の建物と考えられ、SK40と同時期の可能性がある。SB40の脇にあるSD20・SD21はSB５の方角と同じことから当該時期に当てはまるといえよう。SD20・21の両溝は畑などの耕作溝と考えられ、SK40とSB５を含む一帯は古代の集落跡であったと推察することができる。なお、本調査区から南20mにあるミヤジ地区の発掘調査（野々市町教委2003）で発見された掘立柱建物や耕作用畝溝の方向が今回調査のSB5、SD20、SD21と同じであることから、ミヤジ地区における建物などの遺構は古代集落跡の一端であったと考えられる。

中　世

本調査で主体となる時期である。14世紀後半～15世紀後半と15世紀末～16世紀前半の大きく２時期に分かれる。出土遺物と遺構同上の切り合い関係によって、主要な遺構の時期決定を第41・42図に掲載した。細かく観察していくともう少し時期を細分することができるが、本報告では大きく２時期までとした。

14世紀後半～15世紀後半

掘立柱建物（SB）	1　4
竪穴状遺構（SI）	1　4　5　8　9
井戸（SE）	3
土坑（SK）	1　3　4　7　12　15　20　21　23　35　36　39
溝（SD）	3　4　7　8　10　11　17

15世紀末～16世紀前半

竪穴状遺構（SI）	6
土坑（SK）	8　9　13　14　27　28　32　34　37
溝（SD）	1　2　5　9　18

以下、各遺構と出土遺物から両時期における性格を推察する。

第41図　時期別遺構図（14世紀後半～15世紀後半）

第42図　時期別遺構図（15世紀末～16世紀後半）

14世紀後半～15世紀後半

この時期については、調査区中央を東西方向に走る大溝SD３より北側に遺構が集中する。SD３は四方を巡り、調査区外を含む北方一帯を大きく囲い込んでいたと考えられ、SD７・SD10・SD11などはSD３に囲まれた広大なエリアを細分する小区画溝にあたる。

小区画溝で細分された中には竪穴状遺構や土坑などが掘られており、複数の施設が存在していたようである。これらの遺構の中には、人骨と炭化物、釘など鉄製品が大量に入っていたSK４や、人骨や宝塔の部位、瀬戸焼の花瓶等が出土したSD10など普遍的な生活様式とは異なる遺構・遺物が多く検出された。このことからSD３で囲まれた空間地は墓域であったと推定する。大小様々な規模をもった土坑群は墓で、釘が出土する土坑は被葬者を木棺にいれて埋葬した土葬によるものと考えられる。また、SD３から出土した波状文を有した珠洲焼壺137は、火葬した後焼骨を納める蔵骨器、SK21出土の加賀焼すり鉢78は蔵骨器の蓋に転用したものと考えられる。

このように、堀のように深い大溝SD３で囲まれた中には、土葬と火葬の両葬法によって行われた墓がいくつも存在していたようである。墓の形態は、大きな穴の方が棺に入れられた土葬墓、小さい穴は蔵骨器を入れた火葬墓で、地上には土饅頭のような土が盛られ、その上に宝篋印塔など石塔が立っていた景観を復元することができる。布教対象の施設となる堂舎などは見つからなかったが、調査区外に存在していたか、掘立柱建物SB１がそれに相当する可能性がある。

今回の調査では、SD３やSD10から国産陶器や中国製磁器、行火などの石製品といった生活に密着した遺物も多く出土しおり、周辺には僧坊のような生活空間をもった場所も存在していたと考えられる。

なお、本調査区南方にあるミヤジ地区の調査（野々市町教委　2003）で見つかった溝の中からも骨片を確認しており、大溝の外にも墓域が広がっていたと思われる。

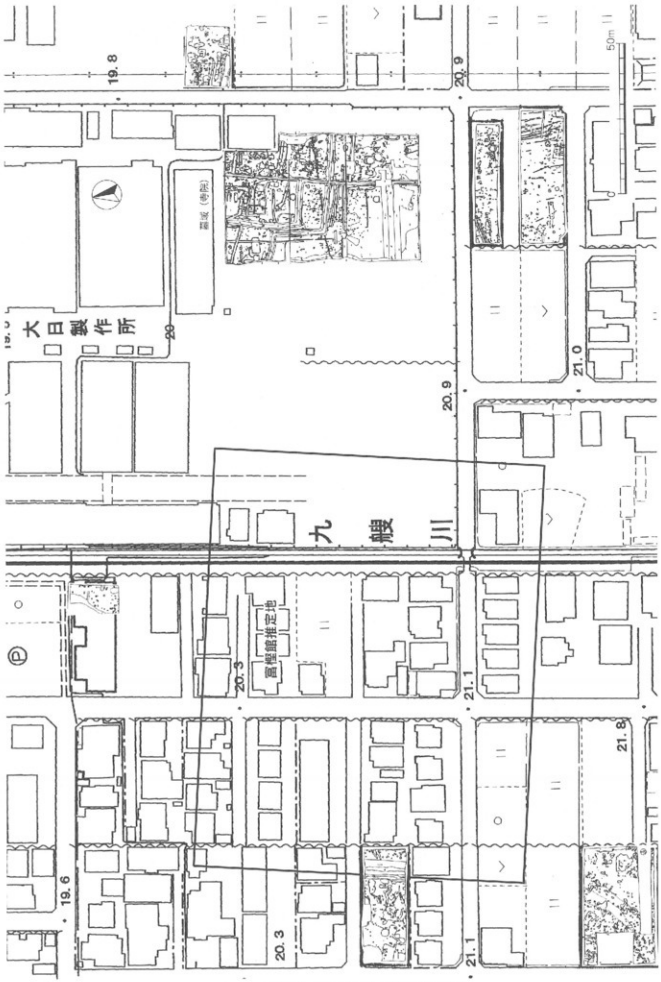
15世紀末～16世紀前半

この時期になると従前まであった遺構は全て埋められ、SD２を中心に新たな遺構が点在する。大溝SD２は調査区を南北に走る溝で、この溝より東側に遺構が集中する。

本調査区から東へ約20mで実施した発掘調査（野々市町教委　1999）ではこの時期と同じ溝が見つかっている。この溝は幅2.2m、深さ40cmと、SD２と比較すると規模は縮小しているが、方位や位置関係などからSD２と合致すると推定され、SD３と同様四周に巡ると考えられる。また、この溝は東西方向から南へクランクすることから、北東のコーナー部にあたり、ここがSD２の北及び東端にあたると考えられる。

この時期においては、墓坑などの遺構は極端に少なくなる。しかし、SK８のように土師器皿が一括して廃棄している土坑があり、祭祀的な場として機能していたようである。また、当該時期におけるその他の土器・陶磁器の組成及び数量は非常に少ないことから、生活色の薄いこれまで存在していた信仰の場としての領域はそのまま保っていたようである。

両時期にまたがって、この地一帯は墓域・祭祀的な場として一般の人を寄せつけない神聖な場所であったと位置づけられる。これは後に「オハカ」という小字名や「照台寺」という寺院が所在したという伝承が残ったことにもつながるといえる。また、この場所は14世紀以降より繁栄してきた守護富樫氏の館推定地のすぐ東隣にあたる。このような立地条件から、今回発見された墓地は富樫氏に関連する施設であったと推察される。しかし、富樫氏の墓は館推定地から東南約２kmの富樫丘陵の一角にある御廟谷（石川県指定史跡）といわれ、また、その近くで発掘調査が行われた額谷遺跡からは、14世紀以降の墓地が発見されている。この墓地からは珠洲焼の蔵骨器や宝塔などの石塔類が出土した。宝塔の中には、近隣の調査で発見されているものより一回り巨大なものも見つかっており、遺跡も富樫氏の詰城とされる高尾城から近く、守護所富樫館を含む野々市一帯を見渡すことのできる好立地な場所に所在する。こ



第43図　富樫館跡調査全体図（部分）

のように、富樫氏の墓地については今回の調査地ではなく富樫丘陵上にあった可能性もあるため、今後更なる検討が必要である。

今回の調査で、富樫館跡は大きく2時期の画期があったことがわかった。その画期は15世紀後半から末で、本調査で確認した墓地やその関連施設は一度全て根絶させ、改めて施設をつくり直している。しかも、機能的にはこれまでと同じ信仰の場として位置づけていながらも、大溝の配置など空間構成は大きく変えている。この現象は、加賀国で起こった大きな政変に因ると思われる。

長享2年（1488）、守護富樫正親は一向宗門徒に攻め込まれ、守護所富樫館から南東へ2kmにある高尾城で自害してしまう。この加賀の一向一揆（長享一揆）と呼ばれる事件によって加賀国は「百姓の持ちたる国」といわれ、その後100年間は一向宗（本願寺）門徒が実権を握ることとなる。このとき、守護職は内部分裂していた正親の大叔父である富樫泰高が任ぜられる。

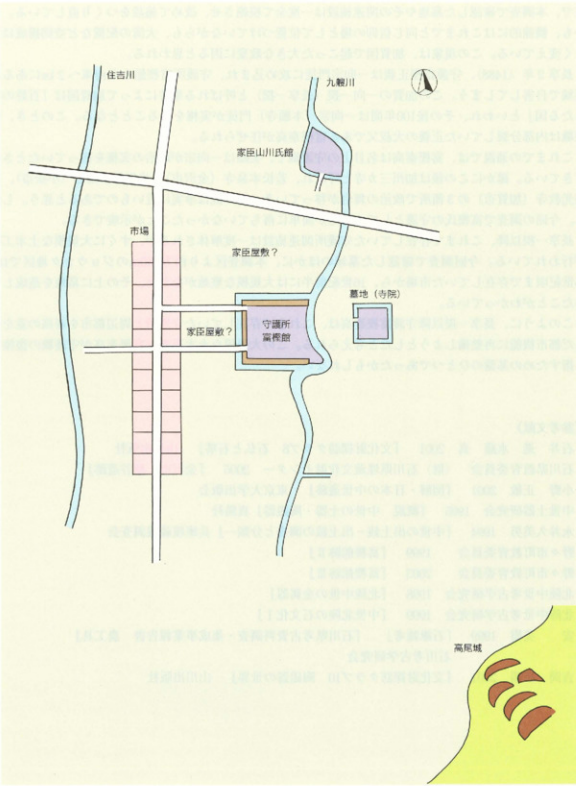
これまでの通説では、富樫泰高は名目上の守護職で、実際は一向宗が政治の実権を握っていたとされてきている。確かにこの後は加州三カ寺と呼ばれ、若松本泉寺（金沢市）、波佐谷松岡寺（小松市）、山田光教寺（加賀市）の3箇所で政治の舞台が移っていき、この説は事実に近いものであると思う。しかし、今回の調査で富樫氏の守護としての勢力が簡単に落ちていなかったことが示唆できる。

長享一揆以降、これまで存在していた守護所関連施設は一度解体されるが、すぐに大規模な土木工事が行われている。今回調査で確認した墓域のほかに、本調査区より西方350mのジョウカク地区では、15世紀頃まで存在していた市場から、16世紀前半には大規模な整地がなされ、その上に墓地を造成していたことがわかっている。

このように、長享一揆以降守護富樫泰高は、これまで存在していた守護所と周辺都市を泰高の意を汲んだ都市機能に再整備しようとしたと考えられる。この大規模な土木事業は富樫泰高が守護職の復権を目指すための基盤のひとつであったかもしれない。

《参考文献》

石井　進　水藤　真　2001　『文化財探訪クラブ8　石仏と石塔』　山川出版社
石川県教育委員会　（財）石川県埋蔵文化財センター　2006　『金沢市　額谷遺跡』
小野　正敏　2001　『図解・日本の中世遺跡』　東京大学出版会
中世土器研究会　1995　『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
永井久美男　1994　『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会
野々市町教育委員会　1999　『富樫館跡Ⅱ』
野々市町教育委員会　2003　『富樫館跡Ⅲ』
北陸中世考古学研究会　1998　『北陸中世の金属器』
北陸中世考古学研究会　1999　『中世北陸の石文化Ⅰ』
安　英樹　1999　『石鍬雑考』　『石川県考古資料調査・集成事業報告書　農工具』石川考古学研究会
吉岡　康暢　2001　『文化財探訪クラブ10　陶磁器の世界』　山川出版社



第44図　富樫館とその周辺（加賀国守護所）復元図

調査地北側（南東から）

SI2（東から）

調査地中央（東から）

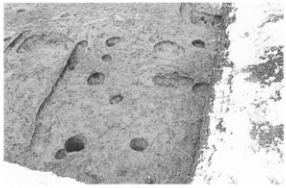
SI4（奥はSD2）（東から）

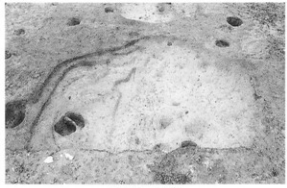
調査地中央（右と手前はSD2 左と奥はSD3）（東から）

SI5（南から）

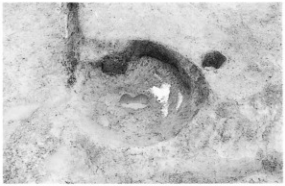
SI31（手前はSI5）（南から）

SI6（右はSD9）（南から）


SB5（南東から）

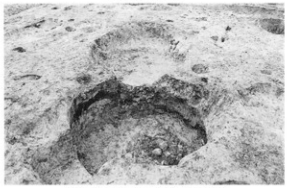

SI8（東から）

SI10（南から）


SK7（左はSD11）（西から）

SE2（東から）

SK8（遺物出土状況）（南東から）


SE3（下）SK39（上）（南から）

SK12（下）SK13（上）（北から）

SK3（北から）

SK17（手前はSD9　奥の穴はカクラン坑）（北から）

SK4（奥にあるのはSB1の柱穴上にあった石）（東から）

SK20（北から）

SK21（上）SK22（下）（東から）

SK35（南から）

SK23（南東から）

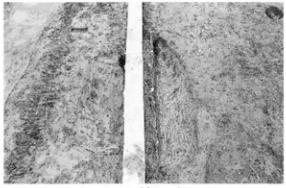
SK39（東から）

SK27（左 浅い穴）SK25（中央 深い穴）（南から）

SD1（西から）

SK33（手前はSD3）（南から）

SD2（北から）


SK34（東から）

SD2（東から）

SD3（東から）

SD10　宝塔（塔身）198　出土状況

SD3（西から）

SD10（北から）

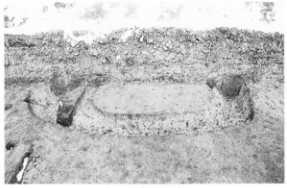
SD4（西から）

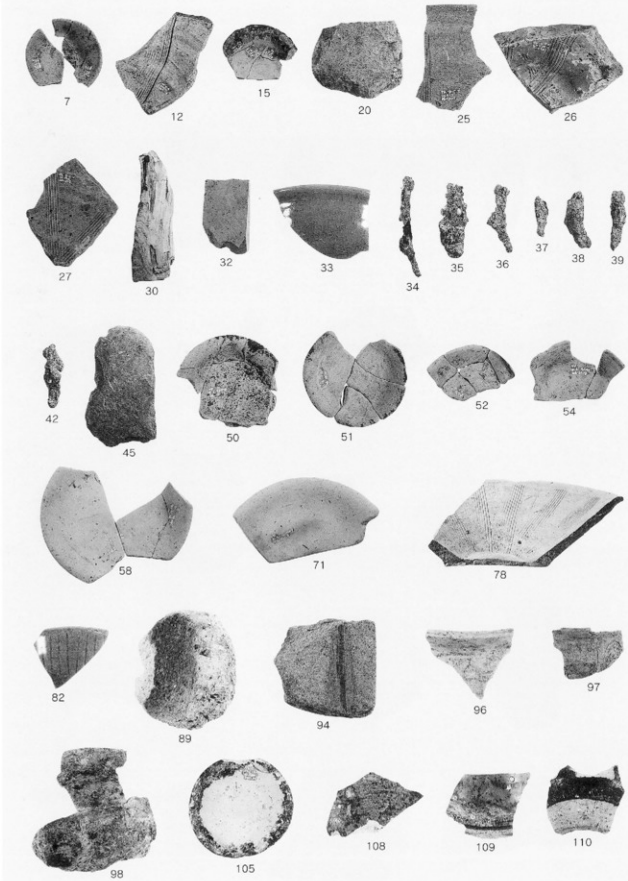
SD11（東から）

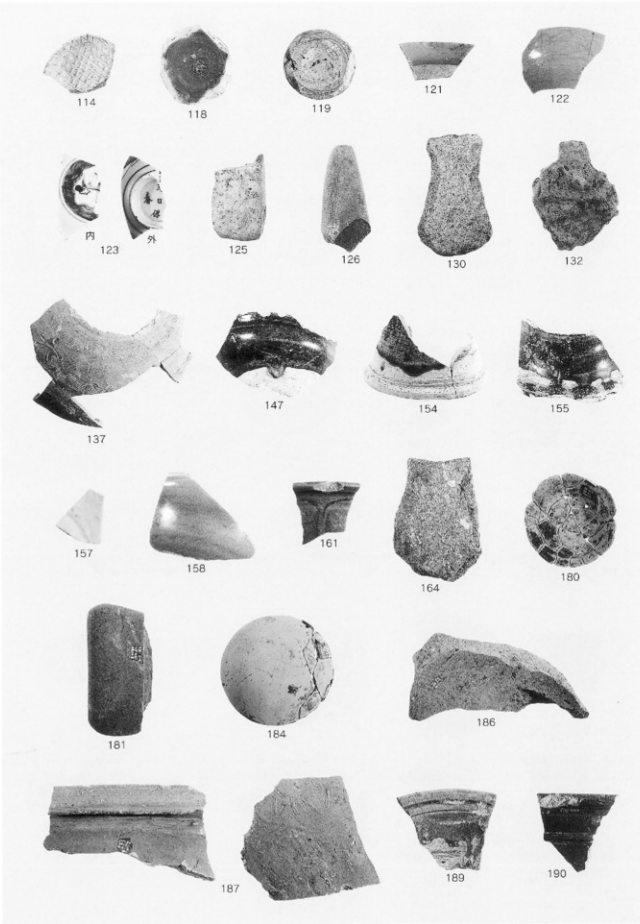
SD8（北西から）

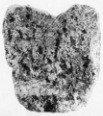
SD17（東から）

SD9（北から）


SD19（西から）


7
12
15
20
25
26
27
30
32
33
34
35
36
37
38
39
42
45
50
51
52
54
58
71
78
82
89
94
96
97
98
105
108
109
110


114
118
119
121
122
内
外
123
125
126
130
132
137
147
154
155
157
158
161
164
180
181
184
186
187
189
190


193

195

196

200

201

198

209

211 212 213

骨

報告書抄録

ふりがな	とがしかんせき
書名	富樫館跡
副書名	株式会社大口製作所工場施設増築用地に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	Ⅳ
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	山村　昌宏
編集機関	野々市町教育委員会
所在地	〒921－8510　石川県石川郡野々市町字三納18街区1　Tel：076－227－6122
発行機関	株式会社大日製作所　野々市町教育委員会
発行年月日	西暦　2007年3月30日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
富樫館跡（とがしかんせき）	野々市町（ののいちまち）扇が丘（おうぎがおか）	17344	16008	36°31′44″	136°37′20″	2005.11.11 ～ 2006.2.14	2,680	工場施設増築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富樫館跡	城館跡	縄文、古代、中世、近世	土坑、溝、掘立柱建物、竪穴状遺構	土器、陶磁器、石器、鉄器	

要約

中世後半の守護所富樫館の関連施設である。大溝で区画された墓地を確認した。墓は土坑墓で、火葬骨や宝塔などが出土した。掘立柱建物や井戸、天目茶碗、行火など生活色の濃い遺構・遺物も確認しており、僧坊のような施設もあったと考えられる。室町期の守護所の構造を考える上で、重要な発見といえる。

株式会社大日製作所工場施設増築用地に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書

富樫館跡Ⅳ

発行日　平成19年３月30日

発行者　野々市町教育委員会
〒921－8510
石川県石川郡野々市町字三納18街区１
bunka@town.nonoichi.ishikawa.jp

印刷　高桑美術印刷㈱

富樫館跡平面図

撮影 平成18年2月 ハッセルブラッド MK-WE 座標系 旗地系 (流地成果2000)
測図 平成18年3月 ツァイスP3 等高線間隔 20cm

1:200

0 1 2 3 4 5 10 20m